ある私娼との經驗

下村千秋

1.443
特500
708
内務省
昭和 5.3.30 禁止
調第491號
東京

始

函 風俗
號 303
永久保存

特500-708
禁風1-121

内務省
昭和5.3.30禁止
第　號

ある私娼との經驗

下村千秋

現代暴露文學選集

天人社

昭和十二年五月廿日

目　次

ある私娼との經驗……一
統計から覗いた暗黑街……三三
或るダンサーの科學的ミステリー……四三
徹宵鬪爭……五七
粉雪の降る夜……六七
明るい暗黑街……九七
ドナウ・ホテルの殺人……一二三

ある私娼との經驗

一

――結局は、二百八十圓ほどの借金を支拂つてやつて、とみ子をその私娼窟から連れ出すことが出來た。その足で私は、停車場で一番近い淺草驛へ來て、そこから三時間あまり汽車にゆられ、夜に入つてYといふ鑛泉場まで來た。藁屋根、小端屋根の家が三四十戸、山裾をめぐつて靜かに並び、一筋道を七日ほどの月がひつそりと白く照らしてゐた。その中ほどの一つの宿へとみ子を引き入れて、私はほッとした。

とみ子は、さういふ商賣の女につきものの病氣から腹膜炎を起し、その二タ月前と一ト月前と二度共、殆んど死にかけた。助かつたのはむしろ奇蹟であつた。その身體の保養のため、何處かの溫泉場へ連れ出してやらうとは前から思つてゐたが、その日玆へ來たのはそのためではなかつた。この場所も、選んだのではなく、咄嗟の間にその名が頭に浮んだので、それだけで此處と極めたまでであつた。

私の氣持は、母猫が子猫を安全な場所へかくまはうとするのに似てゐた。とみ子を喰はうとするある男から完全に隔離しようといふ目的からでもあつた。だからこの場所が若し不安だつたら、すぐもつと安全な所へ連れ出して行く用意を私は持ちつゞけて來た。

私がどうしてさういふ場所の女を、しかも廢物のやうになりかけてゐる女を、借金まで埋めてやつて連れ出す氣になつたか。私の方にははつきりした理由はない。私には健康な妻があり、三つになる可愛いざかりの男の子もあり、平和な家庭生活があつた。外の女を愛する必要もなく、私の愛情にはさういふ餘裕もなかつた。私娼窟などに出入することなどは尙更であつた。にも拘らず、實に一寸としたはづみからさういふ場所へ出入するやうになつた。私にも時々、譯もなく空虛な生活をすることがある。その時だつた。Kといふ惡友が——この場合さう呼ぶべきである——上野のカフエーて上等のウヰスキーを私に飲ませて、それから圓タクをその場所へ飛ばせた。それが始まりだつた。

二

不快な甘酢つぱい匂ひが肌を刺戟する。暗い路次の中を跫音もなく蠢いてゐる人の中を、かなりの反撥心を持つて歩いてゐるうちに、私もいつか一種の魅惑に囚はれてゐた。やがて惡夢を見てゐるやうになり、私の本能は或る一つのものしか感じないやうになつた。

とみ子を知つたのは、かういふ氣持でこの場所へ出入した三度目であつた。そしてとみ子を知つた二度目の夜私は始めて泊り込みをやつた。十月に入つてゐたがまだ蚊帳を釣つてゐた。三疊の部屋へ、布團を敷き、蚊帳を釣り二人が寢ると、身動ぎも出來ないほどだつた。とみ子は大きな結ひ綿の髪をそつと木枕の上に載せて、片脚を私の腰の上に投げかけ、豆煎餅をボリ〳〵嚙つた。何かの動物の傍に寢てゐるやうな氣がした。

その夜の二時頃だつた。階下から、お父つァん（主人）の聲で「とみちやん、とみちやん、旦那だよ！」といふのが聞えた。ひどく端然とした聲だつた。

とみ子はぐつすり眠つてゐたが、その聲でぱッと飛び起きた。首を縮めくの字なりに立ち上つた。そして私の方へチカリと白い眼視を送つた。そこへ唐紙をばさりと開けて、烏打帽をかむり、トンビを被た男が現はれた。

「蚊張を取れ！」とその男は言ひながら、自分の頭の上の釣り手をブツンと引き切つた。

とみ子は蚊帳をかぶつて獅子舞ひのやうにぐる〳〵めぐつた。

「野郎も起きろ！」

私は蚊帳の下から匐ひ出した。その間にその男は、壁に掛けた私の着物の袂に手を入れ、中の物を取り出し、蟇口を開けて金を調べた。それから私の前へ突つ立ち、私の顎を下から持ち上げてヂロリと見つめ、

「君は齒が惡いね？」と言つた。私の片頬には蟲齒を手術した跡が凹んでゐる。それをその男は齒醫者のやうな手つきでさすつて見た。つづいて姓名を訊いた。原籍、現住所、職業、それ等を矢つぎ早に三度繰りかへして訊いた。私は一つも嘘は言はなかつたが、さう急き立てられると少しまごついた。その男はにやりと笑つて、今度は女の方に向ひ、

「お前はいつから玆へ來てゐる？」と言つた。

「今年の三月から」

「嘘つけ、もつと前だらう」

「ほんとは去年の暮れですが、休んでゐたもんですから……」

「その前、何處にゐた？」

「巣鴨です」

「巣鴨はどこだ？」

「カフエーです」

「フン……明日午後二時、署へ來い。二時だよ」

おろ〳〵してゐたとみ子は、この時崩れるやうに膝まづき、

「旦那、勘辨して下さい」とその男のトンビの裾をつかんだ。「旦那、勘辨して下さいよ、勘辨して下さいよ……」さう嘆願しながらとみ子は聲をあげて泣き出した。赤い長襦袢の上に亂れた結ひ綿の髪が細かくゆれる。一寸人形芝居のやうに美しかつた。

「ふざけるな」と男は、とみ子の手を蹴り拂つて、「貴様ももう一度見つけたらそのまゝにして置かんぞ」と、私の方へ下唇を嚙んで見せた。とみ子はまた匍ひ上るやうにしてその男の足に絡みついた。そして、

「勘辨して下さいよ……勘辨して下さいよ……」と叫んだ。その聲は聞いてゐられないほど悲慘だつた。私は、一つの釣り手にぶら下つてゐる蚊帳にくるまつて身を縮めてゐた。

男は、からだをぐいとねぢつて、絡みついたとみ子を振りほどかうとした。その拍子に片肘を背後の唐紙へほすりと突つ込んだ。同時に唐紙はフワリと狹い廊下へ倒れた。とみ子はその唐紙の上までずる〳〵引きずられて行つて、そこでべたりと倒れてしまつた。男は、胸を張つてどしり〳〵と梯子段を下りて行つた。

三

とみ子は布團の上へかへると、木枕で私の方へ境をして、突つ伏したまゝいつまでも泣いてゐた。私は仰向いて寢ながら煙草をふかしてゐた。そしてとみ子の氣持に引き込まれない用心をしてゐた。意識的といふより、本能的にさうしてゐたやうな氣がする。

やがてとみ子は、明日の午後二時までに、自身の體刑二十九日の代りの金刑二十九圓、主人の金刑二十九圓、併せて五十八圓を署へ持つて行かねばならぬと、泣き啜りながら話した。

「それんばかりの金はすぐ稼げるぢやないか」と私は、わざとせゝら笑ふやうに言つた。

とみ子は答へなかつた。

「一體、一日にどれほど稼げる？」

「……」

「十圓ぐらゐ？」

「……そんな日もあるけど」

「平均にして？」

「五、六圓だわ。でもみんなお父つァんに取られちやう」

「まさか、全部取り上げはしまい？」

それからとみ子の説明したところに依ると――假りに十圓稼げば、先づ一圓五十錢を敷代として主人に取られ、殘る金の六分をまた主人に取られ、四分を自分の收入とする。その中から借金を埋めて行くのだが、髪ゆひ賃、化粧代、商賣に必要な品物代を差し引き、たまに蒸し壽司といふものを取つて食べたりすると、借金に埋める金は二圓足らずとなる。それも十圓稼いだ日の話で、平均五六圓とすれば、それをこの割合で勘定すると、一圓とは借金に拂へない。その中からまた金刑の二十九圓を稼ぎ出すには三月はかゝる、といふのであつた。そしてこの金刑は三月目ぐらゐに取り上げられることになつてゐる、といふのであつた。そこへ親からせびられ、病氣をして休むと、借金は嵩むばかりで、この點、なるほど無限地獄であつた。とみ子があのやうな悲慘な聲で哀願したのも無理はないと思はれた。

しかし私は、かういふ事情を知つても、漠然とした暗い氣持には蔽はれながら、そのた

めにとみ子その者に對して働きかけて行く感動は湧かなかつた。場所が場所だけにこつちの氣持はいつか免疫質になつてゐたのかも知れぬ。

とにかくそれが切つ掛けとなり、とみ子はそれから自身の身の上を話した。一つの好奇心から私がそれを話すやうに仕向けたのでもあつた。話し手よりも聞き手の方が眞劍でなければ、かういふ話は出來るものでない、といふ意味をとみ子は言つたので、私は一一うんうんと力を入れて合槌を打ちながら聞いた。聞き終つた時は、頭の上のすり硝子が薄白くなつてゐた。

その話を簡單に言へば――。

四

――七ッの年からとみ子は納豆賣りをやつた。やつぱり納豆を賣り歩く隣りの主婦の後について歩いて、

「ナット、ナットオ――……」と呼び歩くのを習つた。とみ子は私にこれを上手にやつて見せた。

九ツから、近くのセルロイド工場へ、そこへ働きに來てゐる女工の赤ん坊の守りをしに通つた。一日十錢で、二錢が自分のお小使ひになつた。とみ子はそれでベッタラ燒きをするのを樂しみに毎日通つた。しかし外の子供達が身輕に飛び廻つてゐるのを見ると、背中の泣き蟲餓鬼が癪にさはつて、この餓鬼死んてしまへばいゝと思ふことがあつた。

十二の年から、年齢を一つごまかして專賣局へ通ふやうになつた。それまで夜の小學校へ行つてゐたが、この時退學した。小學校は二年生であつた。(とみ子は今でも、片假名と平假名の區別もはつきりしない)

專賣局では、朝日や敷島の吸ひ口の中に入れる三角形の紙片を圓める仕事をした。千本卷いて八錢、半年後には五千本は卷けるやうになつた。

この頃、當時近くの病院の抱へ俥夫をしてゐた父親が、病院の俥ごと行方をくらましてしまつた。母親は、あゝ消々したと無暗に喜んだり、あの人殺し奴がと泣き叫んだりして、

とみ子は毎夜ろくすつぽ寢られなかつた。

それから七ヶ月ほどした大晦日の二三日前の夕方、とみ子が水道端で米をといでゐると、「とみや……とみや……」と息聲で呼ぶものがある。見ると路次の暗い所に、印襦袢を被た男が腕組みをしてちゞかまつてゐる。とみ子は氣味惡くなり逃げ腰になると「とみや、お父つァんだよ」といふのが聞えた。とみ子はびつくりして臺所へ飛び込み、「お父つァんが歸つて來たよ、お父つァんが……」と叫んだ。叫んでゐるうちにワーッと泣き出してしまつた。

母親は、びつくりした中に實に複雜した色を浮べたが、だん〳〵と蒼くなり、その時自動あんまといふので自分の肩を叩いてゐたが、それを片手に持つて臺所へ下りて行つた。父親は臺所口へ來てゐた。それを見ると母親は何とも言へない奇聲をあげて、手に持つたあんま器でいきなり父親の腦天をなぐつた。父親は頭を抱へて地べたへ圓まつてしまつた。とみ子も蒼くなつた。もう泣き聲も出せなくなり、默つたまゝ無茶苦茶に母親のからだへ武者ぶりついて行つた。

それからまだいろ〳〵あつて、とにかく父親は家へ入ることを赦された。病院の俥はもちろん、被て行つた着物もすつかり失くして、その夜の父親はまるで立ん坊のなりであつた。

一年して母親が腦卒中でほいと死んでしまつた。

「あのあんま器でお父つァんの腦天をなぐつた罰かも知れない」ととみ子は私に言つた。

それから二年してとみ子は、專賣局を止して澁谷のある喫茶店へ出た。が間もなく八王子在の小料理屋へ賣られた。十七の春だつた。こゝで半年ほどつとめてゐる間に、とみ子はある百姓の息子に身受けされた。

馴染みそめた頃、その息子は、夜になると途方もない大きな聲を張りあげて唄を唄ひながら山裾を下りて來た。始めはその聲が滑稽に聞えるばかりだつたが、いつかなつかしい味を感ずるやうになつた。そして、

「そろ〳〵遠吠えが聞えて來さうなものね」などと朋輩からひやかされるやうになつた。

その息子は毎日馬車で八王子へこやしを汲みに行つてゐるので、どうかするとこやしの匂

ひをぷん〳〵さして入つて來た。百姓をしてゐる男に接するのは始めてなので、とみ子はその匂ひ――こやしの匂ひばかりではない――には理窟なしにまゐつた。しかしその息子は、ついそこまではそれほど大きな聲で唄つて來たのに、とみ子の前へ來ては顏を赤らめてろくに話も出來なかつた。それがいぢらしく可愛かつた。

ある冬始めの日、その息子の兄貴といふ人が來て、とみ子の身がそこの料理屋から借りてゐるほどの金を並べて、濟まないが舍弟の嫁になつてくれと言つた。言葉は懇ないがよくよくのことで來たことがとみ子にもよく解つた。で、その夜とみ子はその人の後について一里ほどの山裾の道を登つて行つた。とみ子がその家の土間へ入つて行くと、息子は裏庭へ隱れてしまつてなか〳〵出て來なかつた。

山を背にして、厩、こやし小屋、納屋、母家、それを圍んで柿の古木が幾株も枝を張つてゐる。ほか〳〵と暖かさうな百姓家であつた。朝早く息子はこやし馬車に乘つてこの家から町の方へ出て行く。そして夕方は例の張りあげた唄聲を山合ひに響かせながら歸つて來る。その聲が聞え出すと、とみ子は厩の前の大盥へ湯を汲み込んで待つてゐる。そこで

とみ子は馬の脚を洗つてやつた。夕闇の中に湯氣がもや〳〵と立ち上る。馬は氣持よさそうに鼻を鳴らす。

「あたし、これでも毎日馬の脚を洗つてやつたことがあるのよ。あの頃を思ひ出すとほんとにいゝ氣持になるわ。やつぱりあすこに辛棒してりやよかつたのね」とみ子はかう私に言つた。

たつた一ト月でとみ子はそこを逃げ出してしまつたのだ。

「こんな山の中で一生暮すのかと思ふと……それにこやしの匂ひがどうしても好きになれないのだもの」と言つてとみ子は笑つた。

家へ逃げ歸つた次の日、また例の兄貴が迎へに來たので、とみ子は正直に、百姓はいやだからと言ふと、それぢや仕方がないと兄貴は言つて、身受けした金のことなどには少しも觸れずに歸り、それきり來なかつた。

(これからとみ子の顏は急に苦くなり、話もひどく曖昧でそつけなかつた)

とみ子は間もなく、前橋のだるま茶屋へ賣られた。小一年して今度は、長野の女郎屋へ

賣られた。が、二十日あまりでそこを逃げ出した。勿論店には出なかつた。(とみ子はこれを語氣強く言つた)そして身を隱すために横濱へ行き、あるカフエーの女給となつた。それから東京へかへり、深川、神田、巣鴨のカフエーを移り歩くうちに、朋輩の一人(現在同じ家に稼いでゐる女)に誘はれて、この私娼窟へ來た。

「誘はれたぐらゐで、何故こんな所へ入つて來たんだ?」と私は訊いた。

「だつて仕方がなかつたんだもの。ほら、あたしが長野の女郎屋を逃げ出したでせう。それでお父つァんがひどい目に會つてゐたのよ。身の代を返さなきや監獄へ入れるつて騒ぎよ。だからかうでもしなきァ……ねえ!」

とみ子はこれを始め怒つたやうに、終りを捨鉢の調子で言つた。

「それにしても、お前のお父つァんもひどいお父つァんだね」

「だつて、あたしのほんとうの親ぢやないもの……あたしは二つの頃、何處からか貰はれて來たんだつてよ」

「何處からか?」

「……えゝ、何處からだか誰も知りやしない。でもあたしは、あのお父つァんをほんとうの親だと思つてゐるわ。これでも毎月十五圓づゝ送つてやるのよ。中風でもう俥も引けなくなつてゐるんだもの……」

私は、朝の薄白い光りを受けたとみ子の青白い片頰を見守つてゐるうちに、とみ子のさういふ氣持にすつかり引き込まれてしまつた。

五

しかしとみ子から離れてゐると、引き込まれてゐた氣持はだん〳〵と消え失せて來た。どん底へ陷ちて行く女の型にはまつた經路に思はれ、さういふものに對して私の感情は麻痺してゐるのかも知れなかつた。

が、不思議なことにそれとあべこべに、日に〳〵私の心の中に生きて來る一人のとみ子があつた。それは、百姓の息子と馴染みそめて身受けされ、そこを逃げ出す迄のとみ子で

あつた。その息子は頰の赤い健康な青年に想はれ、當時のとみ子はおちやつぴいの可愛い娘に想はれた。思ひ切り張り上げた聲で唄を唄ひながら山裾を下りて來る息子の姿が、馬鹿にいゝ氣持で想像される。夕暗の中に立ちのぼる湯氣に包まれて、馬の脚を洗つてゐるとみ子の格好、その他さま〴〵の場面——凡てに朗らかに穩やかな氣分が漂ひ、凡て愉快な輕い情緒に包まれて私の心の中に生きて來た。勿論これ等の場面は、私が勝手に美化し純化したものに違ひないが、だからと言つてそれ等が少しも空疎な幻影とは感じなかつた。凡てはつきりした實感を伴つて、私の氣持を明るく活々とさした。

一ト月あまりするうちに、私はいつかしよつちうこれ等の場面の中のとみ子を思ひ出して、そして一人自分の氣持の中で、このとみ子を相手に生活するやうな風になつた。これがまた不思議と、家庭に於ける自分の生活を空虛にもせず、また平和な家庭生活と衝突もしなかつた。むしろ靜かな輕い調子の伴奏の如くも感じられ、今まで何處かにあつた隙間を何か柔かい溫かいもので充たされたやうにも感じられた。そして、それでいゝ筈だ、と私は一人思つた。依つて來る事件から言へば、妻や子供には堪らないものに違ひないが、

この場合私の心の裡では、それはその事件から全く離れ、全然別種の性質のものになつてゐるからだ、と私は一人思つた。

が、何だか少し怪しくも感じた。公然と肯定できるものではないやうな氣もしてゐた。だから、ときゞ妻から、

「あなたは近頃、よく一人笑ひをするやうになつたのね」などと言はれると、私は自分の表情を持てあました。

一ト月半ほどして、私は輕い氣持でとみ子を訪ねて見た。この時はもう訪ねるといふ氣持だつた。と、とみ子は病氣で奥に寢てゐるといふのであつた。私は裏へ廻つて臺所からその奥なる部屋へ入つて見た。眞暗といひたいほど暗い二疊の部屋で、とみ子は行火を入れた布團の中に小さく圓まつてゐた。とみ子は私を見ると、白つぽく笑つて、「さきをとゝひの晩、死に損つたのよ。急性腹膜炎といふのですつて」と、しやがれ聲で言つた。いつもの結ひ綿の髪が、今日は引つ詰めにしてあるので、顔が掌の中へ入るほど小さくなつてゐた。引きつけた時に噛んだと言つて、下唇には黒い血の塊をひつつけてゐた。私

は、自分の子供に對するやうないぢらしい氣持になり、兩手でその細つこい頰を包んで接吻をしてやつた。そして、

「藥代ぐらゐ俺が出してやるから、すつかり癒るまで養生してゐなくちや駄目だよ」と言つてやつた。とみ子は、

「うん……」と鼻聲で甘つたれた。

とみ子も淋しがるし、私もいつまでもそこにゐてやりたかつたが、とみ子を最初にかういふ場所へ誘ひ込んだといふその女がお店に坐つてゐて、

「ちよつと、ちよーッと」　何かをたぐり寄せるやうな調子で客を呼んでゐるのがどうも氣になり、一時間ばかりで私はそこを出てしまつた。次の日私はとみ子へ金を送つてやつた。

それから二十日ほどした一月の中頃、私はまたとみ子を訪ねた。と、また急性腹膜で、今度は入院してゐるといふのであつた。私はその足で病院へ行つた。

とみ子は、柔道の道場を想はせるやうながらんとした廣い座敷の隅に寢てゐた。外にも

三四人、みんな方向を別々にして、隅々に寢てゐた。病院といふより一時の救護所といふ感じの部屋だつた。

とみ子は氷嚢を頭に載せ、顏には濡れ手拭をかぶせられてゐた。枕元へ坐つたが、私は自分の顏の血相が變るのを感じた。私は案内の看護婦に向つて、

「とても助かりませんか？」と息を彈ませて訊いた。看護婦はそれには答へないで、

「今、カンフルを注射して、よくやすんでゐますから」と私をたしなめるやうに言つた。

私は、とみ子の胸の上の布團が微かに動くのを見て、とみ子はまだ生きてゐることを確かめるしかなかつた。

私はもうそこにゐたゝまらなくなつた。廊下へ出て煙草をふかしながら往つたり來たりしてゐた。二十分ほどして入つて見ると、とみ子は顏の手拭をはぐつて大きな眼を開いてゐた。私を見て始め一寸解らない樣子だつたが、やがて口のまはりに皺をつくつて泣くやうに笑つた。

私は最終の電車までその枕元に坐つてゐた。

これから私は、毎日の午後、この病院を訪ねた。とみ子は、私が待ち遠しくて、二時間も前から大きな眼を開いて廊下の障子の方を見てゐる、と言つた。

それから三日目の夜、とみ子の足元の方に寢てゐた女が、同じ急性腹膜で死んだ。

「私娼が死ぬのは大抵これです。惡性の外膜と、不衛生と、この寒さとで最後に腹膜を冒され、そしてたちまちやられるのです」

廻診に來た醫者が、とみ子の枕元でさう私に說明した。さういふ場所でさういふ言ひ方をする醫者に對し私は內心憤慨したが、その事實に對してはぞつとした。

しかし幸にもとみ子は、それから七日目に、あと四五日したら退院してもいゝと言はれるまでになつた。私は、とみ子の身をこつちへ引つたくるやうな氣持で、

「それぢや、退院と同時にお前をあの家から連れ出して、自由なからだにしてやらう。借金は全部俺が拂つてやる」と言つた。このまゝあの家へかへれば、その日から客を取らせられる。そしたらまた惡くなるに極つてゐるし、今度やられたら三度目の正直、とみ子の命は助からないに極つてゐると私は思つたからであつた。

もちろんとみ子は喜んだ。涙を流しながら「濟みません、濟みません」を繰りかへした。

六

話は案外簡單に運んだ。借金の二百八十圓ほどを並べてやると、お父つァんは無上に喜んで、

「そいぢや一つ縁切りの祝ひをしやせう。わしだつても二度ととみちやんにこんな所へ來て貰ひたくないからね」と言つて、そこへ來合してゐたお父つァんの妾だといふ蒼ぶくれた年増女に、その邊での飛び切りの料理を取つて來さして御馳走してくれた。とみ子の朋輩もそれにあやかつた。

するとそこへ、生白い顔の首に紫のハンケチを卷いた男が、臺所からことりと入つて來て、みんなの仲間に加つた。その男は、とみ子の身受け話を知ると無茶に喜んで見せて、酒をぐい〳〵あほつた。そしてその生白い顔を私の眼の前へ突き出しては何とか言ひがか

りをつけ始めた。やがて立ち廻りでも始めさうな權幕を示した。

それを見たお父つァんは、その男の腕を取つてぐいと引き立て、

「米さん、い、話がある。內所の相談がある。二階へ來てくれ」と意味ありげに言ひながらその男を押し上げるやうにして二階へ上つて行つた。とみ子の朋輩も何のつもりか、その後についてぢやら〳〵上つて行つた。

とみ子はすぐ立ち上つた。

「早く出ちやいませう、ねえ、い、でせう？」とお父つァんの妾に言つた。するとその年増は二階へ上つて行つたが、すぐ下りて來て、兩手をひろげて早く出ろと合圖した。二人は取るものも取らず裏口から拔け出した。

「あの米さんといふ人、あたしの朋輩のこれよ」と、とみ子は親指を見せ「吉原の牛太郎をしてゐて、あたしを洲崎の女郎屋へ賣らうと先からたくらんでゐるのよ」

「それで解つた。あの女とちやんと示し合しといたのだ。が、あれで濟んでよかつたぞ」

堀割に沿つた道を二人は走るやうに歩いて、やがて私は圓タクを呼んだ。

最初私は、とみ子をその父親の家へつれて行き、先づそこで身を休ませるつもりだつたがそんな男がついてゐることを知ると、即座に豫定を變更し、停車場で一番近い淺草驛へ圓タクを停めて、Y――鑛泉行きの切符を買つたのであつた。

汽車に乘る前、私は妻へ宛て、コンバンカヘレヌ、とだけ電報を打つた。

さうして三時間あまり汽車にゆられ、停車場から宿までは幌俥の中に縮まり、やうやく宿へ落ちついて見ると、外の夜はひつそりと靜まりかへり、宿の中はいやに森閑としてゐる。何だか間が抜けて、こんな遠方まで逃げ出して來なくもよかつただらうにと、私は自分の慌て方が少し可笑しくなつた。

私は先づ妻へ手紙を書いた。急に旅へ出たくなりこゝへ來た。が、間がぬけたやうな靜けさで、長くは暮せさうもない、とにかく金を至急送つてくれ、といふ意味を書いた。これ迄もたまにかういふ旅に出てゐるので、妻はこの手紙を見ても特に心配する筈はない、と思ひながら私はペンを置いた。ペンを置くと一寸呆んやりしてしまつた。(言ひ忘れたが、とみ子のために出した金は人から借りたものであつた)

七

扨て翌る日、私はとみ子に向つてかう言つて聞かせた。

「實は俺には妻も子もあるのだ。だからかうして、お前を受け出しても、お前の一生を引き受けるつもりではないのだ。たゞ俺は、お前をあの魔窟から引き出して自由な身にしてやりたかつたまでだよ」

「どうせあんたは獨り者ぢやないと思つてた」と、とみ子は少し淋しい眉をして「でもそんなことあたし何とも思はない。かうして自由なからだにして貰つたのだもの、後は何んにも望まないわ」と言つて明るい顔をした。とみ子は遠い先のことなどを考へる迄にはならず、今は自身の自由さを喜ぶことで一杯であるらしかつた。

私は重荷を下したやうな氣持になつた。私は、自分のしたことに深い意味をつけまいとした。ふとしたことから一人の女を魔窟から救ひ出した迄のことだ、とだけ考へることに

した。

とみ子は火鉢の前にちやんと坐つてゐるやうなことは出來なくなつてゐた。いつも足を投げ出すか横になるかして、煙草を手から離さなかつた。私はさういふとみ子に對しては出來るだけ無干渉でゐた。私は、とみ子を部屋へ置いて、一人口笛を吹きながら宿の前の山へ登つて行つた。そして落葉し盡した櫟林の日向に蹲りながら、赤城から遠く榛名、妙義の雪を眺めて日を暮した。

が、四五日するうち、私は一つの不安を感じて來た。それは、今まで家庭生活ととみ子を思ふ事との間にあつた、輕い調子の音律の中に、何か不快な雜音が混つて來たからであつた。

私はこの雜音を豫め考へないことはなかつた。が、自分の氣持の緊張の仕方に依つて、これを聞かずに濟むとも考へてゐた。もし聞えて來るとしてもそれはずつと後の日だと考へてゐた。それがさう早く聞えて來たのである。私は呆んやりしてはゐられなくなつた。この雜音をこのまゝ大きくして行けば、自分の家庭生活に波瀾を惹き起す因となるもので

あるからであつた。

七日目に、私はとみ子を東京へ連れかへつた。私が學生時代に二年あまり住んだ下宿屋が小石川にある。その後も年に二三度づゝは立ち寄つてゐて、主婦の氣心は私はよく知つてゐた。私はとみ子をそこへ連れて行つた。そしてその主婦に譯を正直に話して、當分かくまつて置いてくれと賴み込んだ。主婦は快よく承知してくれた。私はとみ子へ言つた。

「お前の親爺へも、自分が玆にゐることは當分知らすなよ。お前の親爺がお前を連れ出しには來ないとしても、あの牛太郎がきつとやつて來るからね。あの男に見つかつたら百年目だぞ。一ト月二タ月するうちにお前の身のふり方をいゝ工合に考へてやるから、それまで落ちついてお主婦さんの仕事を手傳つてゐなさい」

さうして私は自分の家へ歸つて行つた。家庭の平和は以前と變らなかつた。私はほつとした。

それから四五日置きに私はとみ子を見に行つた。とみ子は赤い腰卷の尻を逆さにして、よく長い廊下の拭き掃除をしてゐた。

と、三度目に私が見に行つた時であつた。とみ子はその下宿から姿を隠してゐた。人が迎へに來た樣子もなく、電話がかかつて來たのでもなく、一昨日の朝、一寸買ひ物に行つて來ると言ひ置いて出たまゝ、歸つて來ないといふのであつた。

私は、しまつたと思つた。直覺的にさう思つた。その足で私は惡友Kを訪ねた。そしてとみ子との今日までのいきさつをあらまし話して、

「ひよつとしたら、元の家へかへつてゐるかも知れぬ。とにかく行つて見て來てくれ。君にもそれくらゐのことをする義務はあるのだ」と言つた。

Kは頭を搔いてゐたが、日が暮れると出かけてくれた。三時間ばかりするとKは歸つて來た。Kは大きな聲で愉快さうに言つた。

「やつぱりゐたよ。例の結ひ綿でね。だが、後生だから君には內所にしてゐてくれと、一所懸命賴んでゐたよ」

それを聞くと私は、足元の地面が急に陷沒したやうな寂しい驚きを感じた。Kはまた言つた。

「彼女達に取つてはあの場所は、蛙に取つての池のやうなものだね。何だかそんな氣がした。とても元氣に愉快さうにガァ〳〵騷いでゐたよ。僕等から見れば地獄のやうな所でも、彼女達には案外の極樂かも知れんぞ」

「惡友だけのことを言ふね」

と私は苦笑しながら煙草に火をつけた。

――一九二八・一二月

統計から覗いた暗黒街

——手記の中より——

大東京に於ける（昭和三年十二月末現在）

藝妓の數……一萬四百四十人

公娼の數……六千百三十九人

私娼の數……二千人

計……一萬八千五百七十九人

以上は公然と、或は半公然と男の性享樂の對照となるもの、しかし大東京に於けるこの種の女は、これでは止らない。卽ち、

A、カフエーの女給

B、ダンサー

C、日本料理の酌婦

D、高等內侍

E、街娼

（以上凡ての一部を意味す）

但し、これ等の數を正確に調査したものはない。で、これは概算であつて、

その總計……一萬三千人

これと、前の藝妓、公娼、私娼とを加へると、

合計……三萬一千五百七十九人

さて大東京に於ける男の數を約二百萬人と見れば、この種の女は、男六十人に對して一人といふ割合になる。が、二百萬の男のうち、二十歳未滿と、五十歳以上の男とを、この種の女を對照として性の享樂をなすことは、或ひは不適當、或ひはあまり興味なきものとすれば、卽ち言ひかへれば、二十歳以上、五十歳までの男が最もこの種の女を對照として享樂するに適當であり興味あるものとすれば、その數は五十萬となる。この五十萬を、右の女達に割り當てゝ見れば、

男十六人……女一人

然し尙ほ、この五十萬の男のうち、約三割は、道德堅固、趣味高尙にして、或ひはまた生活に餘裕なくして、これ等の女に近づかないものと見ていゝ。すると殘りが三十五萬人

となる。これを、右の女に割り當てゝ見ると、

男十一人……女一人

で、これ等の男が、毎日その種の女に接するとすれば、彼女達は一日平均十一人の客を取ることゝなる。もし男が一日置きに接するとすれば、彼女達の一日平均が五人と五分、二日置きに接するとすれば、彼女達の一日平均は、三人と七分弱、三日置きとすれば二人と七分强となる。

ところで、公娼一日平均の男の數は二人と一分四厘となつてゐる。私娼のは約三人となつてゐるから、この平均が二人と六分弱である。卽ち彼女達は、一日平均二人と六分弱の割合で男を吸引することに依つて、現在に見る如き生活をつゞけてゐるのである。この割合は、男が三日隔きにこの種の女に接した割合、二人と七分强とほゞ符合してゐる。

そこで、最後に動かすべからざる實證があがるのである。卽ち、大東京に住む男にして二十歳以上、五十歳以下の男の約七割迄は三日置きに一度、言ひかへれば、四日に一度は藝妓か公娼か、或ひはカフエーの女給か、ダンサーか、日本料理の酌婦か、高等內侍か、

街娼か、この内、どれかに必ず身を以て接してゐるのである。

「近頃不景氣で」とか「この節忙がしくつて」とか「もうまるで興味がないよ」とか言つて、てんとしてゐる二十歳以上五十歳以下の男があるとすれば、それはあまりいけ圖々しく、それをそのまゝ信ずるものはよつぽど頓馬である、と以上の統計は物語るのである。

以上は、所謂暗黒街のみの統計ではない。何故ならば、藝妓や公娼やカフエーの女給やダンサーや日本料理屋の酌婦の住む世界は、暗黒街ではない筈であるから。

で、次に所謂暗黒街の女に就ての或る統計を示して見る。

龜戸、玉の井に住む私娼二千人のうち、六百五十三人の前身、卽ち、彼女達は何處から轉落して來たかを調査したものを見ると、

二百二十五人（三割四分五厘）カフエー、日本料理、そばや、牛鳥屋、めしや等より轉落したもの

一一一人（一割七分）農家の娘

一〇二人（一割五分五厘）女工

八三人（一割二分七厘）田舍茶屋の達磨

四五人（六分九厘）無職

一六人（二分五厘）藝妓

一六人（二分五厘）待合女中

一三人（二分）宿屋の女中

九人（一分四厘）公娼

その他、映畫館の案內、看護婦、事務員、女優、遊藝人、妾等々。

合計……六百五十三人

これで見ると、暗黒街の女でない筈の藝妓、公娼、カフエーの女給、日本料理の酌婦等の女がこの暗黒街の中に可なりの數を占めてゐる。青樓、紅燈の巷、歡樂境などゝ呼ばれてゐる所も、實はこの暗黒街の入口なのである。でなければ、この兩者には大きなトンネルが通じてゐて、絕えず、明るい方から暗い方へ流されてゐる女があるのだ。

こゝで最も注目しなければならぬものは、この暗黒街の中に、農家の娘と女工の多いことである。卽ち、全體の三割二分五厘をこの兩者が占めてゐることである。農家の娘がこの世界に入る原因は言ふまでもなく貧乏である。その貧乏の主なる原因は、肥料代と稅金の支拂ひに追はれるためである。毎年、年の暮れが近づくと、この世界に流れ込んで來る多くの百姓の娘の告白がそれを證明してゐる。女工がこの世界に入る原因は、貧乏と同時に、工場に於ける酷使である。朝から夜まで日の目も見ずにこき使はれる苦しさから逃れるためである。

で、これ等、この暗黒街に陷ちて來た原因を、二百五十人に就て調査したものを見ると、この內の二百二十七人、卽ち全體の九割强までは、親、兄弟、子供、良人、或ひは自分自身の飢ゑを救ふため、といふことが明らかになつてゐる。

その飢ゑを救ふために、彼女達は、どれほどの金額で身を賣つてゐるか。彼女等四百十五人に就ての調査を見ると、

百圓未滿……七一人

百圓以上……一四三人

二百圓以上……一一一人

三百圓以上……五九人

四百圓以上……二五人

五百圓以上……四人

これを一人當りの平均にすると約二百圓となる。これは或る小說家が一枚十五圓の稿料を取るとすれば、約十三枚分である。この小說家が一時間に五枚書くとすれば、約二時間半の手間に當る。

この小說家の二時間半の手間賃に相當する金のために一身を賣り、その金を消却するために、彼女等は、どれほどの勞働と歲月を費すか。

彼女達の一日一夜の實收入は、平均一圓五十錢であるから、これを一ヶ月稼いで四十五圓、二百圓を稼ぎ貯めるには四ヶ月と十五日間ぶつ通しに勞働せねばならない。

——一九三〇・一月

或るダンサーの科學的ミステリー

或る夜、Tが來てかういふ話をした。

――この間久しぶりで本牧のUホテルへ泊りに行つたよ。ところで、ちよつと乙な話があるのだ。

例の通り僕はウヰスキーに醉つて、目茶苦茶にチャールストンを踊り、へと〳〵になつてホールの隅のソファーに倒れてゐると、

「苦しいでせう、召し上れ」と言つて、プレーンソーダを持つて來てくれた女がある。見るとピンク色の洋服を着たイートン型の斷髪の女である。それはまア珍らしいことではないが、それが、コップをテーブルの上へ置かうとしてこゞんだ時のうなじの美しさ、には僕は思はずゾッとしてしまつたのだ。

イートン型の斷髪のうなじは、どうかすると小汚ない感じを與へるが、その女のそれは可憐な處女と、美しいちごさんとが持つてゐるあのすつきりとしたふくよかな美しさだつ

たのだ。僕は、いきなり立ち上り、女の手を執つて、「一しよに踊らう」と叫んだ。すると女は、僕の手をふつくらと握りしめて、

「あたし、まだ踊れないのよ」と言ふ。

その言つたことなどはどうでもいゝ。たゞ、その聲が馬鹿に可憐でうぶで、エロテックなんだ。しかも僕の手は、彼女のあたゝかい手でふつくらと握りしめられてゐるのだらう。

ところで、僕は、深酒の祟りで、××××不能者であることは君も知つてるだらうときゞ〳〵本牧へ泊りに行くのも、僕の手や口や舌を樂しませるだけであることも知つてるだらう。それが君、今の現象だ。これは全く奇蹟だね。僕は再生したやうに喜び、直ちに彼女を連れて二階の部屋へ入つて行つた。僕はわく〳〵してゐる。

すると、彼女は、

「あたしにダンスを教へてよ」といふ。僕は答へた。

「二人が××××××××、教へてやらう」

「えゝ、なるわ」

×××××××××××××××××。そこで僕は、×××××××××××ひつけて、ツーステップを教へ始めた。

そこまではまだよかつたが、ふと見ると、すぐ隣りの部屋で、これも××××××男女がツーステップを踊つてゐるぢやないか。おや！　と叫ばうとすると、いや、それはその部屋の大きな姿見に映つた僕達二人の恰好だつたのだ。と解ると、僕は、もう目がくらんでしまつた。それほど昂奮してしまつたんだ。そして意氣地のない話だが、×××××××××××××××××××。

それが切つかけとなり、僕の××××不能は完全に復活した。その夜、××××××。

さて、それから四五日した夜のこと、僕は舊友の醫博でWといふ男の所へ遊びに出かけて行つた。そして、今の話を細かに話してきかせたのだ。

と、Wの言ふには——君は日本一の果報者だ。といふのは、さういふ女は千人に一人か萬人に一人しかないからだ。うなじが馬鹿に美しかつたとか、聲が可憐でうぶでエロチッ

クだつたとか、そんなことは問題ではない。そんな女はザラにあるから、問題は、その女が、僕等仲間で謂ふところの、エレクトリック・エナーヂー、つまり電氣的精力といふのを持つてゐるといふことだ。大ていの女は、千人のうち、九百九十九人までは、フイヂカル・エナーヂー、つまり物理的精力のみしか持つてゐないだが、極く稀に、さういふエナーヂーを持つた女がゐるのだ。ところで、さういふ女にぶつかつたら、石でも泣くといふのだ。つまり、男性の全生命力は、そのエレクトリック・エナーヂーの放射線にぶつかるとその瞬間に、そのまゝ×××に變化してしまふのだ。生きてゐる男なら必ずさういふ變化を起すのだ。生命力がそのまゝ×××に變化する以上は、×××××などは問題にならないのだ。

しかし、このもつともらしい科學的説明も、吾々の醫學上から見れば實は馬鹿氣たことで、あり得べからざること、謂はゞ一つの落し話みたいに聞える。で、僕も、その説明を仲間のある男から聞いたときは、一笑に附してしまつたのだ。

すると、どうだね。つい一週ほど前の夜のこと、僕は例の赤坂のダンスホールで、それ

を實驗してしまつたのだ。

その女もやつぱり斷髪洋裝で、なか〳〵美しい表情を持つてゐた。が、踊りは新米らしく休む時はいつもずらりと並んだ椅子の眞中どこに坐つてゐた。僕は、何度目かの踊りをその女に申し込んだのだ。そして女の手を執らうとした瞬間である。僕は、からだ中がしびれたやうになり、ふら〳〵としてしまつた。吸つた息が逆行して、この胸が泣きたいやうな、可哀相みたやうな、何ともいへない切なさに包まれてしまつた。

僕は倒れかゝるやうにその女のからだへ抱きつき、殆んど夢中で踊り出したが、踊り終つたときは、全身がくた〳〵になつてしまつた。僕は、女といふものを知つてから何十年ダンスホールへ通ひ出してからも、まる一年になるがかういふ經驗は生れて始めてなのだ。僕は、君ほど×××××ぢやないから、刺戟といふか、變化といふか、とにかくその女の何物かに依つて受けた影響は、實にひどかつたのだ。

次の夜も出かけて、その女と踊つたか、やつぱりその影響はひどい。やつと二度踊つてぺろ〳〵になり、ほう〳〵の態で逃げて來てしまつた。恐ろしくて、もう二度と行くまい

と思つたが、そして今日で五日ほど行かずに我慢してゐるが、その我慢ももう出來さうもなくなつた。それほどあの女は、不思議な吸引力を持つてゐるのだ。

そこでだ。さつき話したこと、僕が一笑に附したといふ女のエレクトリック・エナーヂーといふものが、やつぱり、稀にではあるが、かくの如く存在するものだ、といふことを僕は僕の體驗に依つて實證することが出來たのだ。これは醫學や科學を超越した一種のミステリーだね。さうして君も、そのミステリーに遭遇したといふのだから、何と言つても日本一の果報者だといふのだ。」

Wからこの話を聞かされると、僕は全くびつくりして喜んでしまつた。そして言つた。

「お互ひに、こんな果報者になれるのも、ホテルやダンスホールが出來たおかげだね」

「いや、全く困つたものが出來やがつた」

そんなことを言つてゐるうちに、僕の胸はいつか、泣きたいやうな可哀さうみたやうな變な氣持になつて來た。

本牧ホテルの彼女のエナーヂーを僕の胸が感電したんだね。

僕はもうぢつとしてゐられなくなつた。すぐ本牧へ出かけやうとしたが、それには充分の金がない。困つた。よし、ぢや、赤坂のダンスホールのダンサー、Wが體驗したといふその女で間に合はしとかうと、それからすぐ出かけて行つたのだ。

行つて見ると、ちやうど土曜の夜で、ホールの中は湧き立つてゐる。ハワイヤンヂャヅのひゞきが、ホール中を引つ掻き廻してゐる。さういふ中から、Wの話したダンサーを探し出すことは殆んど不可能に思はれた。僕はホールの隅に行んで、雲の如く渦卷流れる男女の群をたゞぼんやりと眺めてゐた。

と、どうだね。奇蹟は奇蹟を產むのだ。本牧の彼女が、渦卷き流れる雲の中に、一人のヤンキーボーイと踊つてゐぢやないか。僕は思はず手を擧げて、よう、と叫鳴つたね。すると彼女も僕を認めて、ヤンキーボーイの肩越しにキッスを投げた。そして踊りが濟むと、彼女は僕の前へひらりと飛んで來て、

「まア、まア……」

「とにかくお茶を飲まう」

「駄目、いけないの、かうして話してることも、踊りながらそうつと話しませうよ」
チャヅがまた始まつた。二人は踊り出した。踊りはじめるや、僕の胸は、電氣アンマ機のやうにブーンとうなり出して、もう堪らなく切なくなつて來ちやつた。僕は渾身の意力と氣力を出して、ステップを踏んだ。そして平靜を裝はうとして、
「君も、こんな所まで稼ぎに來るんだね」と言つてやつた。と、彼女は、僕の肩をチクリとつねつて、
「うそ。もうあそこを引き上げて、こゝのダンサーになつたのよ」
「やァ、そいつァなほ更ら驚ろいた」
「馬鹿、これだつて人間よ」
そのうちに僕はもう、惡夢に、それとも良夢かね、とにかく夢心地にふら〳〵して來ちやつた。そのふら〳〵した氣持の中で、ふゝん、と胸に浮んだものがある。卽ちWのことだ。
「君は、醫者で、Wといふ男を知つてるかえ」

「お醫者かどうかは知らないけど、Wといふ方は知つてるわ」
「そら、眼鏡をかけて昭和ひげを生やして、いやにつんとすまして踊る男サ」
「えゝ〳〵、その人よ。でも、五六日前、二度ほどいらしたきり、姿を見せませんわ」
僕は、ふゝんとまた腹の底で笑つた。
その夜僕は、骨を拔かれた木偶坊のやうになつて、圓タクを家へ走らせながら考へた。
「俺も二度とあのダンスホールへ足を踏み入れまい」
それにしても、彼女のエレクトリック・エナーヂーとやらが、馬鹿々々しいほど不思議なので、といふのは、あのダンスホールへは二度と行くまいと決心したものゝ、僕もやつぱり我慢しきれなくなつたので、そこで先つその不思議を解決するために、僕は、先輩の動物學者B先生の所へ出かけ、その一部始終を話して、
「そんなことがあり得ますか？」と訊いて見たのだ。するとB先生は、微笑を浮べながらかう答へたのだ。

「わしは、女にかけては至つてどぢですから、さういふ種の女に就ての動物學的說明をすることは出來ません。しかしこゝにかういふ例があります。それは誰でも知つてゐるあの螢であるが、螢は幼蟲時代、つまり、水の中に棲んでゐる時も、尻から光を放つてゐますところであの光は、熱といふものを少しも持つてゐないのです。この熱のない光といふものを、もし人間が造ることが出來たら實にありがたいことで、早い話が、あの火に燃え易い映畫フイルムを映寫する場合、フイルムを絕對に燒き焦す憂ひがなくなるといふやうな譯ですから、世界中の科學者が、どうにかしてその熱のない光を造り出さうと、一所懸命螢の尻の研究を積んでゐるのですが、まだ〳〵その端緒も發見できない有樣です。で、吾吾科學者に取つては、あの螢の光は一つの神祕なのです。そして。生物、動物の本能の偉大さに驚いてゐるばかりなのです。

そこで、螢ですらそのやうな神祕な本能を持つてゐるのですから、人間である女が、今あなたが話したやうなエレクトリック・エナーヂーとやらを持つてゐても、別に驚くことはないのです。また螢は、異性を呼び寄せるためにあのやうな光を放つて飛び廻るのです

から、男を呼び寄せねばならぬ女が、そのやうなエナーヂーを持つてゐることも驚くことではありますまい。殊に、男を呼び寄せることに依つて自分を生かしてゐるダンサーのやうな女が、特に不可思議なエナーヂーを放射するのは、當然すぎるほど當然でせう。それに、ダンスホールといふ所は、さういふエナーヂーを放射するに都合よく出來てゐる所らしいですからね。

たゞ、お氣の毒なのは、さういふ女の放射線に依つて、全生命をそのまゝ全性慾に變化さして踊り狂つてゐる男達です。何故といつて、××××の動物は、××性慾が燃えつきると同時に消滅するものですから」

僕はそこで、　先生の顏を見詰めながら、しばらく呆然としてゐたが、最後にかう答へてやつた。

「先生、それが近代人の本望なんです」

——一九二九・十月

徹宵鬪爭

…いくら夏がひまだつて、毎年こんなか知らねえ、おかみさん。もう學生の夏休みも終つた筈だしサ…ちよいとようさん、ようさん、ようさァん…。

あゝ、咽喉がかわいちやつた。今年ア、西瓜が馬鹿安ね、一つ十錢よ。そいで、あたいの頭ぐらゐあるよ…あら、メガネの旦那…カバンが重さうね。預かつといて上げるわよ。ねえ、ちよつと旦那、いらつしやいよ。

えゝ？　そこぢや話が遠いわよ。お入りなさいよ。えゝ？　二枚でいゝわ。高かないわよ、まア お入りなさいよ…ちえッ…。あたしア菜種子の花と咲くよ、ドッコイショ、あなたア、蝶々で、來てョウ、とまるウ、アリアナア…。

ねえ、もう二枚出して、お泊りなさいよ。まだ十時だけど、あんたゞから、もう×××××××××。…ねえさア、たまにや、奥さんにやきもちを燒かして上げるもんよ

もう奥さん××××の飽きちやつたでせう。……へん、ケチな人ねえ。ぢや、こんど來たら、きつと泊るのよ。ねえ、あたし、あんたの××××が忘られないんだからサ。

ちよつとにいさん、馬鹿に粋だわね。お上んなさいよ。あたし一目で惚れちやつたよ。……だから、一枚でいゝわ。ね、お上りなさいよ、え？　これ？　蚊に喰はれたのを引つ掻いたの。をかしいでせう。鼻の頭が缺けちやつた、ハッハヽヽヽ。おや〳〵。それぢや駄目ぢやないの、ちよつと、にいさん、にいさァーん……えゝ、この蚊とんぼ野郎。

違ふ。もつと北、もつと、もつと北の方。さう、石狩よ。前借？　前借は……三百八十圓、來てから七ケ月になるけど、まだやつと六十圓だけ消したきりさ。あんた獨り者？……受け出してよ。あたし、二十五までにたつた一度でもいゝわ。丸髷に結つて見たいのよ、しみじみ。……お父つァんと、妹と弟三人と、おばァさんと……一家の犠牲となつて暗黒街に笑ひを賣るあはれなる一少女！　ちよつと、この煙草、何といふの？　エヂプ

ト？　エヂプトつて、何處にある國サ。あたし、活動見たいなァ……どうしても泊れないの？　まァ意氣地なしねえ、やぢやありませんか。ぢやこんど、ひるま、ゆつくり來てね。

だんな、ちよいとだァーんな、……へゝん、このおたんちん。

もう十二時よ。放しやしないよ。……えゝ？　四枚に負けとくわよ。そりや××××××××××。痛いわよ。亂暴ねえ、この人。あゝ臭い、一抔五錢のブランを引つかけて來やがつて、あゝ、あばよ、さよなら、またおいで、チャラ〳〵チャンだ。

どうせならなきァ、ダイナマイトドンだ……。

ねえ、お願ひだから泊つてよ。もう一時よ。泊りがきまらないと、あたし、御飯も食べられないのよ。そりや夕御飯は食べたけどサ、夜半にもう一度食べなきァ、朝までのおつとめが出來ないでせう、……ねえ、三枚でいゝからサ……ちエッ。

この馬鹿野郎、大馬鹿野郎……畜生！　けだもの！　ぬすと！

へッへ……、ねえ、おかみさん、十錢玉二つ持つて來て、これでひとつ××××だつてサ。それも泣きさうな顔をして言ふのよ。あんなにも××××××ねえ。だからね、お前さん、××××があるかえ、ひとつ見せてごらんよ。見せたら、只だ××××よ、と言つたら、そいつめ、いきなり前××××、××××××××。

ちよいとお兄さん、こつちへおいでよ。あんたいくつ？　十四、五、六？　可愛いわねこつちへおいでよ。お小使ひ、いくら持つてるの？　そんなに恐がらなくてもいゝわよ。取つて食べやしないからね……。こつちへおいでつたらサ。ねえ、こんばん、あたしが××可愛がつて上げるから、お上りよ。……××××上げるよ。あたい、上手よ。おやおや、まるで天井裏に育つた猫の子だね。そのくせこんな所へ來て見たいんだね。……ちよいとお兄さん、お兄さん……そつちは溝よ……ホッホ、ぢや、さつさとお家へおかへり。

未成年者がこんな所をうろついてると、お巡りさんにしかられるよ。

ちよつとわァさん、わァさん、昭和ひけの若さん……ね。ちよつと、ちよつと、ちよつと、ちよーつと……あゝ癪！

ブン、ブン、ブーン……と來たね。今なる時計は三時なり。夜はしん〳〵と更け渡り、……ちよつと旦那、上つてよ。もう何處も起きてゝしないから、歩いたつて駄目よ。……ねえ上つてよ。もう遲いから二枚半でいゝわ。……へん、野良犬。

一枚ぢや、いくら何でも可哀相だわ。もう一枚出してよ……細かいのがなけりや大きいのを出しなさいよ、こはして上げるわ。……何をするの！　冗談ぢやないよ、大きな聲を出すわよ。どなるわよ……あッ〳〵……ぢや一枚でいゝからサ、一枚でサ……あぶない、……あッ！……。

馬鹿、畜生！……人殺し……人殺し……人ごろオシ！　あゝ、死んだ方がよつぽどいゝや……。

ちよつとようさん、上つてよ。さうオ、あんたも客を拾つてるの。あたしも客を拾つてるの。あたしは、もう夜が明けるといふのに、まだ一人も拾はないのよ。だから上つてよさうオ、大丈夫よ、まさか、自動車をかついで行く奴もないよ。そんなに心配なら、うちの前へ持つてきときなさいよ。……えゝ泣いたわ。たつた今、だつてサ、あんまりしどい客なんだもの。あいつめ、一文の金も出さずに、腕力で、腕力どころぢやないのよ。ピカ〳〵光るものを出しやがつてサ、たうとうあたし、×××××××××。弱い商賣だから警察へ訴へる譯にも行かないしサ。……あたしなんか死んだ方がましだわ。あら、かへつちまふの……。

あんまり暑いもんですから、起き出して來たとこなんです。……えゝ、實はさうなんで

す。こんばんはほんとに碌なことがないんですよ。たうとう御飯も食べずに、怒鳴り通しで……それでたうとう泊り客がないんですよ。でも、そいで店をしめちや癪だから、もう三十分、もう十五分と思つて坐つてゐるうちに、こんな時間になつてしまつたんですの。もう何時でせう？……さう、ぢや、もうぢき東が白むわね。……もう白服ぢや、こんな夜更けにや寒いでせう……えゝ、先月、二十九圓の××××つたわ。どうせ死ぬまでこゝを出られやしないでせう。さう諦めてゐるのよ。……あしたは非番でせう、遊びにいらしてね。

ちよつと、お泊りのかへり。早いおかへりね。ふられたの、さう！　可哀相に。ぢや、もう一度遊び直して行かない。……只ぢや困るわよ。さよなら。

えゝ、寢ますよ……おかみさん、けふ、あたし一日休みますよ。……だつて、こんなことをしてゐたら、あたし、死んぢやうもの。……さうオ、ぢや、休みませんよ。どうせあたしのからだはあたしのものぢやないんだから、生かすなり殺すなり、勝手にするがいい

わ。……えゝ、えゝ、どうせさうですよ。

ちよつと、朝遊びをしてかない？　えゝさうよ。馬鹿でフヌケで意氣地なしで、面がまづいもんだからね、夜が明けてもまだ賣れないのサ、あゝさう、どうぞ。

いゝえ、もう寢ませんよ。見つともないもくそもありやしないわよ。あたしア、かうして、目が見えなくなるまで、聲が出なくなるまで、脚が腐るまで、坐つてるわよ。……何をするんだね。おかみさん！……あゝ、あゝ……×せ、×せ、×せ！

――一九二九・十月

粉雪の降る夜

一

粉雪の降る夕方、吾妻橋から白髭の方へ渡るボンボン蒸汽の中であつた。船内は石油のにほひがして暗く寒かつた。Kは、煙草をふかしながら窓越しに、暗い河面へ注ぐ雪脚を眺めてゐた。と、

「すみませんが」と言つて、細い指先にはさんだ煙草をさし出したものがあつた。見るとそれは若い女であつた。火をすひつけてやりながら更によく見ると、白粉と口紅をこつてりと塗つたこは張つた顔半分が、すひつける火に染つてほの赤く映つた。そして甘ずつぱいやうな匂ひが鼻先に漂つた。この時Kは直感した。これは川向うの暗黒街にすむ女であらうと。

さうとわかるとKは、少し酒にも酔つてゐたので、自分でも知らぬ間に持ち前の遊蕩心を湧かしてゐた。女はまた商賣柄すぐそれを感づいたらしく、ぐつとKの方へからだを寄

せて來て、
「寒いですわね」
「仕方がない。お互ひに寒くないやうにすることですね」
すると彼女は、紅色のショールの中へ顎を埋めて、男の氣持に絡むやうにふゝつと笑つた。
船が着いて岡へ上ると、Kは彼女と並んで歩き出した。彼は洋傘を持つてゐたが、それはわざとささずに、彼女のさした蛇の目の中に入るやうにして歩いた。しばらくすると、
「どちらまで？」と彼女がきいた。
「寺島まで」
「さウ、ぢや、ご一緒にねがひますわ」そこで彼女はKの方へちらりと笑つて見せて「お差しつかへなかつたら、あたしの家まで送つて下さらない」
來たな、と思つたKは、すかさず、
「えゝ、お送りしませう」

二十分ほど歩くと、明るい通りから暗い路地へ入つた。そこには雪が蒼白く積つてゐた。Kは、やがて例の私娼窟の中へ入り込むだらうと豫期しながら歩いてゐた。が彼女は、三四度折れ曲つた露地角の暗い家の前へ立つて、その雨戸の鍵を開けた。
「ちよつと待つてね」
彼女は中へ入ると、梯子段をみし〳〵上つて行つた。三四分ほどして、
「お上りなさいよ」と梯子段の上から忍び聲で呼んだ。それがいかにも秘密の快樂といふやうなものを豫期せしめる聲で、Kは思はず興奮した。
二階の座敷は四疊半であつた。鏡臺と食卓と、瀬戸火鉢とリリアンの飾りをつけた電燈と赤いメリンスの座蒲團と、すべては私娼窟の中の一室を聯想せしめた。Kはォーバを着たまゝ坐ると、言つた。
「君は獨立で商賣をしてゐるのかえ？」
と彼女は、
「しッ」といふやうな目つきをして「そんなこと訊きつこなしよ」そして火鉢越しにKの

手を握り「あんた、今晩、泊つてもいいんでせう」

そこで改めて彼女の顔を見ると、顎が尖り眼が冷たく唇が薄く、かういふ商賣をするにはひどく不向きの顔であつた。

「泊つてもいいが、大丈夫かえ？」

「大丈夫よ。あたしの家ですもの」

「何だかいやに森として、氣味が悪いな」

「そんなことを言つたつて、もうかへしやしないわ」

「それに馬鹿に寒い。火をおこさうよ」

「そんなこと面倒くさいから、もう寢ちやいませうよ」

「ぢやなんか食べよう。君も夕飯はまだなんだらう」

「ええ、でもそのうちナンキンそばが來るから、それを取つて食べればいいぢやないの」

彼女は、Kの手をしつかり握つた上に、尙も頭から壓へつけるやうにそんなことを言ひながら、Kをその場から一歩も動かすまいとした。ばかりでなく、一種いふべからざる冷

たさと暗さといやな凄さとが、その言葉の調子にもその表情にもちらりちらり閃いた。

このためにKは、遊蕩氣分の大部分を打ち消されてゐたが、しかしかういふ彼女の容子も、彼女が私娼窟から獨立して單獨に人目を忍ぶ商賣をしてゐる弱味から、自然に出て來たものだらうと解して、結局彼女の言ふなりになることにした。——自分の物好きをうすら寒く冷笑しながら。

うしろの窓の硝子へ、ときどき粉雪がサラサラと當つた。

二

その夜更けであつた。

Kが便所へ立つて部屋へかへつて來ると、つけといた筈の電燈が消えてゐた。Kは、少し變に思ひながら、手探りでスキッチをひねつた。そして寢ようとして、ぎつくりして飛びのき、棒立ちに突つ立つてしまつた。

そこには、Kの足許には、顔に白い布をかぶつた人間が、しやつきりと寢てゐるではないか。枕許の小箱の上には、花と線香と蠟燭とがある。——それは死人であつたのだ。

瞬間、夢かな、とKは思つた。さう思ひながら部屋を出ようとしたが、兩脚が硬直して動かなかつた。彼は叫ばうとした。

と、次の瞬間、Kは息のつまるほど彼女に絡みつかれてゐた。彼女は何にも言はず、まるで暴力で彼を部屋から引き出した。そして廊下をへだてた部屋——そこが彼の寢てゐた部屋であつた——そこへ彼を引きずり込むと、蒲團の上へねぢ伏せた。それから彼の胸の上へ折り重なつて彼女は呻るやうに言つた。

「あんたは、こんな小さな家の中で戸惑ひしたりして…どうせ後で見て貰ふつもりだつたのだけど…あれはあたしのお父つァんよ…今朝がた死んでしまつたのよ…」

今までの彼女の態度の不可思議さが初めて解つた。彼は言つた。

「…苦しい。手を放して」

「こはがらない？　逃げ出さない？　あたし、殺されても逃がしやしない」

「…とにかく、わけを話せ」

「話すからこのまま蒲團の中へ入つてよ」

下手に逆らうと殺されるぞ、とKは思つた。それほど彼女には一種の殺氣があつた。でKは彼女の言ふなりになつた。すると彼女は、右手を彼の×に捲きつけ、口惜しさうに齒ぎしりをしながらかう言つた。

「お父つァんが可哀相です。だからあたしはこんなに口惜しがつてゐるんです。あんたは迷惑でせうけど、災難でせうけど、あたしあんたに頼みがあるんですから、助けて下さいね、助けて下さいね…」

「それぢや何だか解らない。順序を立てゝ話せよ」

そこで彼女は起き上り、着物をひつかけて寢床の上にきちんと坐つた。そして、悲しみに壓倒されてゐるといふよりは、或る興奮で緊張しきつてゐるといふ風に、蒼白い頰を顫はしながら話し出した。その話は——。

三

一昨日の朝であつた。彼女の兄が泥だらけのズボンで、彼女のこの部屋へ踏み込んで來た。(この部屋は、Kが想像したやうに、彼女の單獨の×××ではなかつたのである。彼女はやつぱり近くの私娼窟の中で稼いでゐるのであるが、避難所兼休養所として、ひとりでこの部屋を借りてゐるのであつた。で、私娼窟の方で、朝、泊り込みの客をかへすと、ここへ來て一眠りぐつすりと眠ることにしてゐたのである)

さうしてやつと眠りついたばかりの彼女を、兄は叩き起し、その枕許へ突つ立つて、「おい、金を出せ！」といふのである。まるで强盜でもするやうに。

彼女は、さういふ態度に出て來た兄を未だ曾つて見たことがないので、尠からず驚かされた。氣が狂つたのではないかとさへ思つた。

今までの兄は、青年らしい興奮を見せることはあつても、彼女に對してはいつも、兄ら

しい寛大さと、彼女の商賣に對するつつましやかな同情と理解とを持つてゐた。また兄は彼女に對してさうしなければならない義務もあつた。といふのは、彼女はこの兄のために私娼窟の中へ身を賣つたのであるから。

しかし、この兄のためにと言つても、單に金が目的で身を賣つたのではなかつた。一口に言へば、兄の主義の實行運動の資金を得ようとしたためであつた。その一年ほど前、兄はK町のモスリン工場へ勤めてゐた當時、或るストライキの刺戟から熱烈な反資本主義者となつた。そして工場から追ひ拂はれた。兄はその足で實際運動の仲間へ入つた。同時に資金の必要に迫られた。と、兄は、當時場末の怪しげなカフエーに働いてゐた彼女の所へ來て、ローザ・ルクセンブルグといふ女革命家の話をして、

「同志のためには牢獄にも入り、殺されもする。お前が私娼窟に入るくらゐ何でもない筈だ」と言つて、三百圓の資金をつくるため、私娼窟へ身を賣ることを彼女に賴んだ。はじめ一ト月ばかりは彼女はそれを頑强に拒んだが、まるで死にもの狂ひの兄の熱と力とにはつひに動かされた。そして承諾した。

兄は泣いて感謝した。彼女はまた、嘗つて非常に不幸な結婚をしてゐて、人の一生なんてものはどんな生き方をしても結局はみんな同じことだ。幸も不幸もあつたものぢやないといふ捨て鉢の考へを一方に持つてゐた時なので、いざ私娼窟へ身を沈めると腹をきめると、それほどそれが苦痛でも厭やでもなかつたのである。

さうして彼女が私娼窟へ入つて間もなくであつた。或る日、父親が突然、一人の巡査に伴はれて、彼女が住みこんでゐる家へ訪ねて來た。父親は、丸ノ内の或る役所の小使兼掃除夫を勤めてゐたが、その勤めに出る時の小倉服で、彼女の前に立ちはだかつて叫んだ。

「けふ限り、親子の縁を切るぞ！」

そこで彼女はうつかり、

「どうして？」と訊きかへすと、父親はいきなり彼女の頬をなぐりつけて、

「馬鹿、くたばりやがれ！」と叫んだ。「貴様の兄は國賊になりやがつた。貴様は畜生になりやがつた。二人共、今日限り、俺の子供ではないぞ！」

父親はさう叫びながら、興奮で顔中を涙にまみらした。すると、ついて來た老巡査も興

奮して言つた。

「あなたは國民の手本だ。人民の模範だ。國寶だ。政府から表彰される人だ。そして死んだら銅像に立てられますぞ！」

父親はますます興奮し、地だんだを踏みながらまた叫んだ。

「わしはたつた二人の子供しかない。その二人を今勘當するのだ。わしは飢ゑ死んでも、二度と子供の世話にはならぬぞ！」

老巡査は、父親の肩へ手を置いてまた言つた。

「だれがあなたを飢ゑ死させるものか。日本中の人が、死ぬ迄幸福に暮さして上げます！」

やがて父親は泣き泣き引き上げて行つた。

かういふいきさつ、即ち彼女は、兄の主義のために身を賣らされ、その身賣りのために親子の縁も切られた、といふいきさつの後だつたので、兄は、その責任を一人で背負つて月に一度は必ず彼女をその私娼窟に訪ねて來た。そしてまことのこもつた言葉で彼女の安否を訊ねた。彼女は、兄のその生眞面目さが少しをかしくもなつて、いつもかう答へた。

「淋しくも辛くもないわ。平氣よ」

しかしほんたうを言へば、彼女は何が何だか解らずに夢中で生きてゐるのであつた。今の私娼生活に對してもさうであつた。父や兄に對してもさうであつた。父の言つたこと、したこともほんたうに思はれ無理もなく思はれるし、兄の言つてゐること、してゐることもほんたうに思はれ、當然のことのやうに感じられた。また老巡査の言つたことも嘘とも思へなかつた。父はほんたうに國家から表彰されて、生涯幸福に暮せさうにも思はれた。

彼女はこれらのことを考へて、結局どれが最も正しくほんたうのことか解らなくなつたまま、最後に自分の現在の身の上に考へ及ぶと、すべてを投げ出してかう言つた。

「どうとも勝手になりやがれ」

兄は、三月に一度の割合で、彼女から二十圓乃至三十圓の金を取り上げて行つた。その度に兄は、いつもよりは深い同情と理解をこめた言葉で彼女の職業の辛さを慰め、その上例のローザ・ルクセンブルグの牢獄生活の話をした。それを話す時の兄の顔は、熱と力で赤くなつた。そして大きな額が妙に尊く光つて來た。彼女はついホロリとなつて、兄のた

めには死んでもいいとも思つた。

さうして一年ほどした一昨日の朝、その兄が、まるで强盜のやうな身なりと劍幕で彼女の枕許へ立ち、金を出せ！　と叫んだのである。彼女がびつくりし、兄は氣が狂つたのではないかとさへ思へたのも無理もなかつたのである。

四

彼女は寢巻のまま立ち上つて、兄の肩をゆすぶりながら大きな聲で言つた。

「兄さん！　どうしたの？　しつかりしてよ」

と、兄はあべこべに彼女の肩をゆすぶつて、

「大きな聲を出すな。俺は今、人を殺して來たんだ。……今朝、暗いうち、踏み込まれて俺は逃げながら射つてやつたんだ」

「……」

「だから、もう一刻もぐづぐづしてゐられないんだ。早く金を出せ」
「金を持つて、どこへ行くのさ」
「上海へ高飛びするのだ」
「だつて、あたしにそんな金はないよ」
「馬鹿いへ、貯金がある筈だ」
「……」
「まだ解らんか、貴様も射つぞ！」
さういふと兄は、上衣の右ポケットから短銃を取り出した。それを持つた手が興奮でふるへてゐる。その顔は殺氣立つて、醜くゝ引きつつてゐる。そして、それ以上いらいらさしたなら、兄はほんたうに引き金を引きかねない樣子である。
彼女は、箪笥の抽斗から、貯金の通帳を取り出して、兄の手に渡した。すると兄はそれを彼女の手へつつかへして、
「貴樣が行つてさけて來い。ありつたけさけて來い」

彼女は、何もかも滅茶苦茶になつちまへ、と自分に言ひながら着物を着かへて外へ出た。
金を下して歸つて來ると、兄は玄關のたたきに立つて、ズボンの泥を落してゐた。彼女ががらりと硝子戸を開けると、びつくりして振り向いた。金を渡すとそれを碌に見もせずにポケットへ押し込んで、
「ありがたう。これであと三年後を待て。でなけりや五年後を待て。いゝか、俺のすることを信じろ」
さういひながら兄は梯子段を走り上つた。そして、
「おい、俺の靴はどこだ、靴がないぞ！」と叫んだ。二階へ上つて靴のことを言つてゐるところ、兄はよつほど慌ててゐたのである。
「靴は下にあるぢやありませんか」
「よし、解つた。大きな聲を出すな」兄はさう言ひながらまた梯子段を走り下りて來て、
「おい、もつと金がないか？」
「それがありつたけよ」

「おかみ（女を抱へてゐる娼家の主婦のこと）から借りて來い」
「だめ。もう借りられるだけ借りてゐるのを兄さんも知つてるでせう。もう一錢だつて貸してくれやしないよ」
「よし、そりや惡いことを言つた。そこでいいか、タクシーで中央線だぞ。うまく行きアモスコーだぞ」
そんなことを言ひながら兄は靴をはいて、狹いたたきの上で足踏みをしてゐたが、やがて硝子戸を開けて野良犬のやうに飛び出して行つてしまつた。
彼女は、呆然としてしまつた。世界中がガタガタにぶち毀れてしまつたやうな氣がした。彼女は、玄關の上り段へ腰を掛けて、いつまでもぢつとしてゐた。
と、昨夜の十時頃である。彼女はいつもの家の障子のかげに坐つて、そこへうろついて來る男を呼んでゐた。そこへ、背廣を着た男が入つて來て、いきなり障子の横の扉を開けると、
「お前の名は何といふのだ？」といふ。彼女は、それが刑事だとわかつたので、素直に名

をいつた。
「それが本名だね？」
「さうです」
「ぢや、ちよつと來い。賴みがある」それから少しくだけた聲で、「寒いから着物をどつさり着て出るがいゝぜ」
いつもとは調子が變つてゐる、と思ひながら彼女は、コートを着、ショールを掛け、手袋をはめて外へ出た。背廣の男はそれを見て、
「よし、その支度ならいゝだらう」
街角まで來ると、そこに一臺のタクシーが待つてゐた。彼女は、その男と並んでそれに乘せられた。
タクシーが走り出してしばらくしてから、彼女はやつとかう思つた。
——人を殺したといふあの兄のことで、警察へ呼ばれるのだらう。
タクシーは、夜更けの街の中を可なり長い間走つてゐた。さうして着いたところは、大

きなコンクリートの建物の玄關先であつた。背廣の男は、彼女をそこで下して、建物の裏へ廻つた。そこのトタン塀の木戸を開けて、地下室へ下る段々を下りて行つた。ドアを開けて一室へ入つた。そこには、金ボタンの服や背廣を着た男が四五人ゐた。みんなストーヴを圍んで、中の二人は夜食の辨當を食べてゐた。男の臭氣が、ストーヴの熱にむされてむつと彼女の鼻を打つた。

「御苦勞、これかえ？」

「これだ」

「汚ねえ白首だな」

「まだいゝ方だ」

そんなことを言ひ合つた。それから背廣の男は彼女を、金ボタンの服を着た男の前へ連れて行き、

「ぢや、お頼みします」と言つた。

金ボタンは、立ち上り、外してゐた襟のホックをはめながら彼女へ、

「お前の商賣はなんだ？」と言つた。

「……」彼女は默つてゐると、

「××××××を賣つてるから、碌なことがないよ」さうして、背後のドアを押し開け、

「こつちへ來て見ろ」

その部屋は、石膏壁のまつ四角な部屋であつた。まるで石棺の中のやうであつた。隅に一つの寢臺が置いてあり、そこに一人の老人が寢てゐた。

「お前は、このお爺さんを知つてるかえ？」

金ボタンは、突然さう言つた。その老人は暗く陷ち込んだ目をつぶつてぢつと仰向けに寢てゐる。——見ると、それが彼女の父親だつたのである。一年前に彼女を勘當してそれきり會へなかつた父親だつたのである。

五

「ほやほやしてゐちや駄目だよ」と金ボタンは言つた。「もう少しでお前のお父つァんは凍え死ぬところだつたんだ。今日の夕方、省線電車のU驛の便所の中に倒れてゐたんだぜ。それをここへ連れて來てやつたんだ。それから醫者を呼んで診察させると、別に何處も悪くないといふ。多分、この寒さで、手足の自由が利かなくなつたんだらうといふんだ。こんな年寄りをそんな目に會はせて、お前は罰が當るとは思はないか」

「……」

「そこでだ、とにかく家へかへしてやらうとして、住所を訊いたが、爺さん容易に言はない。それをやつと言はして、その家へ使ひをやつたところ、そこには鍵がかかつてゐて、誰もゐないといふ。お前は、お父つァんを一人で住まはして置くのか？」

「……」

「仕方がないので、それから子供があるかないか、息子か娘があるかないか、それを訊いたが、またそれも容易に言はない。それをなだめすかしてやつとのことで、お前の名とお前のゐる場所をきき出したのだ。一體お前は誰のために××をしてゐるのだ。親のことも

構ひつけないで××をしてゐるやうな奴は、一日も生かして置けないぞ！」

「……」

三十分の後、彼女は父親をそこから連れ出すことにした。警察でタクシーを貸してくれた。で、それへ父親を乗せて、彼女が間借してゐる寺島の家へ連れて來た。

二階の彼女の部屋へ蒲團を敷き、運轉手の手を借りて父親を寢かしてから、彼女は初めて父親へ言つた。

「お父つァん、かんにんしてね、かんにんしてね……」

しかし父親は何とも言はない。つむつた目を開けようともしない。

「お父つァん、何か食べたい？　なんでも取つて來るから、いつてよ。何がいゝの？」

それでも父親は口を開かない。ただ、彼女が口を開く度に、その額に暗い影のやうなものが宿るばかりであつた。

「お父つァん、お父つァん！」

彼女は、父親の顔へ口を寄せ、泣きさうな聲で叫んだ。と、父親の頰には、堪らなく苦

痛の色が浮んだ。

彼女はその時になつて初めて、父親の頑固な沈默とその苦痛の色との謎を解くことが出來たのである。――一年前、自分はこの父から畜生と呼ばれ、そして勘當されてゐるのだ。さうして現在もその畜生の生活をしてゐて、勘當されたままになつてゐるのだ。父が自分の言ふことを聞かうとせず、顏も見ようとしないのはそのためだと。

彼女はもうものを言ふことを止めた。默つて外へ出て、まだ起きてゐる蕎麥屋を探し、あつたかいものとお酒を取つて來て、父親の枕許へ置いた。しかし父親はそれを振り向きもしなかつた。

もうどうしていゝか解らない。とにかくかうして幾日か一緒に暮すうち、父親の心も和らぐだらう。それを待つより外はない。さう思ひながら、火鉢に靠れてゐた。

トタン屋根に、あられがサラサラとこぼれて止んだ。そして夜は更けて行つた。

夜明けに間近い頃であつた。彼女は火鉢に靠れたまま、ついうとうととした。と、父親が妙な呻り聲をあげた。はつとして眼を開くと、父親は、痩せ細つた片手をあげて、宙を

搔き廻してゐる。彼女は傍へ寄つてその手を持つてやりながら、

「お父つァん、どうしたの、夢？　夢？」と訊いた。

すると父親は、彼女の手をしつかり握つて自分の胸の所へ持つて行つた。

「胸が苦しいの？」

父親はかすかにうなづいた。と思ふと、眼を開いて、彼女の顏をまじまじと見守りはじめた。やがてその目から涙がぽろぽろこぼれた。彼女はどうしていゝか解らなくなり、

「お父つァん、お父つァん！」と呼びながら、ハンケチでその涙を拭いてやつた。が、涙は止め度なくこぼれる。と、しばらくして、瞳孔が大きく開いて來て、息を一つ大きく吐いたかと思ふと、ガクリと顎を引いた。父親はそれきりで死んでしまつたのである。

六

父親は、何が原因で死んだのか。彼女は先づそれを知りたかつた。それから、父親のか

らだをどう始末すればいゝか。次にそれを考へねばならなかつた。彼女は、その前日、ありつたけの金を兄に取られてしまつてゐたので、父親のからだを火葬場へ送ることも出來なかつたのであつた。

彼女は、夜の明けるのを待つてその家を出た。幸ひ、階下に住んでゐた一家族がその十日ほど前、他へ引つ越してしまつてゐたので、父親の屍を二階へ寢かしたまま、玄關の戸に鍵をかけて外へ出た。

先づ彼女は、父親の勤めてゐる役所へ行き、父親の最近の容子を訊いて見た。が、だれも小使兼掃除夫の父親の動靜を注意してゐなかつた。唯一人、少年の給仕が、前日、父親の容子に就てこれだけを言つた。

「昨日のおひる頃、S警察署から電話がかゝつて來て、それで出て行つたきり歸らなかつたのですよ。何だかひどく顏色をかへて慌てて、辨當箱を置いて行つたり取りに來たり、また置いて行つたり取りに來たりしてゐました」

これを聞いたとき彼女は、からだ中がゾーッとするやうな興奮を感じた。人を殺したと

いふ兄がつかまつて父親は警察へ呼び出されたのに違ひないことが解つたからだ。同時に父を行き倒れさしたほどの激動はそこから來たのであることが解つたからだ。父親の死の原因に對する疑問がはつきり解けたからだ。

この時である。今まで解らなかつたすべてのこと、どれが正當で、どれが間違つてゐるか　何がほんたうで何が嘘であるか、それらが痛いほど彼女の眼の前に判然して來た。減茶苦茶になつちまへ、どうとも勝手になりやがれ、と捨て鉢にしてゐた今までの生活のすべてが、彼女の前に整然とした形を取つて現はれて來た。その彼女の目には、父の死の原因をつくつたと思はれる兄の行動も警察の仕打ちも全く映らなかつた。ただ、老いほれた父親の小さなからだを土塊のやうに踏みにじつて行く、途方もなく偉大な、そして人造人間のやうなからくりを持つた怪物がのしのしと歩いて行く姿が映つた。

彼女は強く首を振つた。そしてしつかりとした足どりで歩き出した。とにかく父親の葬式を濟ますだけの金を工面しようと。

彼女は叔父の所へ行つた。が、玄關ばらひを喰はされた。いとこの家へ行つた。そこで

も斷られた。もう一人のいとこの所へ行つた。そこでも斷られた。

彼女は上野驛の便所へ入つた。そこで彼女は微笑さへしながら顔へ白粉と紅を塗つた。そして口入屋へ出かけた。お妾にでも達磨茶屋の女にでもなりますからと、その前借を申し込んだ。が、その場で金を渡すことは絶對に出來ないと斷られた。

もう手段は盡きた。彼女は父親の屍のそばへ歸るために吾妻橋からボンボン蒸汽に乘つた。尙も金を得る何かの手段にありつかうと考へながら。

彼女は、Kを相手にこゝまで話して、最後にかう言つたのである。

「あたしはさうしてあなたをこの家へ連れて來たんです。何のためにつれて來たか、もうよくお解りでせう。どうぞお父つァんのからだをお骨にするだけのお金を出して下さい。お願ひです。……お願ひです……」

そこで彼女はしばらく默つてゐたが、やがてまた興奮して來て叫ぶやうにかう言つた。

「いつかお巡りさんがあたしの前で、お父つァんへかう言つたでせう——あなたは國民の

手本だ。日本中の人があなたを生涯幸福に暮さしてくれる、そして死んだなら銅像に立てられる、と。それだのにお父つァんは、野たれ死ぬやうにして死んでしまつて、そしてお葬式も出して貰へないでゐるぢやありませんか。……それでこのあたしが、お父つァさんの屍をとなりへ置いて、お父つァんが畜生だといつたことをしなければならないんです。さうしてお父つァんの屍の始末をつけようとしてゐるんです。……だれがこんなことをさせるのか。どうしてこんなことをしなければならないのか、あたしにはそのわけがはつきり解つてゐます。そしてそれを思ふと、それを思ふと、あたしは口惜しくて口惜しくてならないんです……この仇を取らないうちは、あたしは死んでも死にきれません……」

——一九三〇・三月

明るい暗黒街

——これは小説ではない——

若し強ひて、暗黒街と呼ばなければならぬとすれば、それは明るい暗黒街である。その明るさは、役所、銀行、會社、學校等に勤めてゐる無數のインテリゲンチュアの生活より遙かに豐富な明るさに充ちてゐる。これはバラドックスではない。彼女等の中の一人がかう言つた。

「こゝへ來るまではいつも食ふや食はずで、泣いてばかりゐたが、こゝへ來てからといふもの、何一つ不自由するものはなし、面白くつて愉快で堪らないわ」

彼女はこれを自暴自棄的に言つたのでは決してなかつた。正直にさう感じてゐるが故に正直にさう言つたのであつた。しかし一先づ、

「肉體を切り賣りすることが、そんなに面白くて愉快なことかね？」

と訊いて見た。と、その返事は、

「そりやずゐぶん辛いけど、食ふや食はずに泣いてゐた時分の辛さと較べたら何でもない

わ。月給取りや職業婦人の勤めの辛さと較べても、この方がずつと暢氣で氣樂な仕事だわ」と言ふのであつた。

「一旦陷ち込んだら、二度と明るい娑婆へは出られさうもないこの無限地獄の中でも、そんなに暢氣で氣樂かえ？」

「無限地獄なんて言つたら、誰だつて無限地獄の中に住んでゐるのぢやないの。誰だつて自分達の世界より以外に明るい娑婆なんてありやしない」

かく彼女の考へは徹底してゐた。

これは横濱の本牧海岸のKホテルの女の告白である。

酒と唄とダンスと肉と、これ等を悉く金に換算した生活が彼女達の生活である。いかに無能な女でも、月百五十圓をキャッシで自分の收入とすることが出來る。多いものは二百五十圓から三百圓となる。この金は彼女の好むまゝに自由奔放に使用していゝのである。その美衣美食は、ブルヂョア婦人の美衣美食より優るとも劣ることはない。しかも多くの

ブルヂョア婦人が、白痴に近い亭主一人を相手として、泥沼の底に在るやうな腐敗した生活に欠伸をしてゐる間に、彼女達は、世界中のぴちぴちした若い男達を相手に、まるで大空に在るが如く生々と唄ひ且つ踊つてゐるのである。面白く愉快で、暢氣で氣樂であることは當然であらう。

彼女達の生活は灯のつく時分から始まる。(土曜、日曜は午後から始まる)酒場とダンス・ホールの天井のシャンデリヤから、青い光と、赤い光が、部屋中にみなぎり始めると、洋裝、和裝、支那裝、和洋折衷裝の彼女等が、或ひは斷髪で、或ひはおさげで、或ひは大島田でゆらり〳〵と各自の部屋から現はれて來る。

クララ・ボウ、アリス・ホワイト、ドロレス・デル・リオ、ルーブ・フェレッツ、グレタ・ガルボー、或ひは栗島澄子、入江たか子、夏川靜江、千早晶子、伏見直江、等々、お望みのスターに扮した彼女等である。

そこへ天下のヴァレンチノ、ナヴァロを氣取つた色男が胸を張つて悠々と入つて來る。

ハンチングをかむつたウエルネル・クラウス、大禿頭のダグラス、セーラー・バンツの鈴木傳明、ロイド眼鏡の井上正夫、チョボ髭のリチャード・アーレン、それ〴〵斯界のオーソリティーと見まがふ若壯老の好紳士が、ふらりふらりと上つて來る。

それからビール、ウイスキー、ベルモット、キュラソー、ウオッカ。續いてレコード、自動ピアノのジャズで、フォックス・トロットにチャールストン――さうして部屋中、ホテル中が湧き立つ。

さてその間に、ショート・タイムの客が、一人一人と部屋から消えて二階のベッドへ。が、これ等は僅か二十分で片づけられ、物足らぬ顔に再びダンス・ホールへ吐き出されて來る。Kホテルの如きは（これは世界中のセーラーの間に膾炙されてゐるさうである）オールナイト二十圓、酒代とおばさんへのチップを合せると三十圓。それが土曜日の晩だと、オールナイト三十圓、他を合せて四十圓といふ豪遊となる。その豪勢さは推して知るべきであらう。

そこで二階のベッドの部屋。それは世界中のどんな明るい家庭の寢室も及ばぬ、明るさと、美しさと、神祕さと、寢心地よさとを持つてゐる。なぜなれば、それは彼女達がその豐かな稼ぎによつて、空想通りを實現化した寢室だからである。それはまことに、お伽噺の中の女王樣の寢室を想像すればいゝ。空色の薄絹のカーテン、スタンドの卵色の灯、鏡の前のグロキシニヤの香り、純白のダブルベット。緋縮緬の掛蒲團。それ等のなかで彼女は、「モン・バリ」のなかのヂョセフィン・ベイカーの姿態で、相手の彼を飽くまで享樂せしめるのである。

「命無數にあらば
夜毎に死なん
おゝ、われ等が天國」

こんな落書が、壁にかけた裸體畫の額緣に書いてあつたが、これはこの部屋に夜を明した彼等の僞らざる告白であらう。

藝妓よりもカフェー、カフェーよりもダンス・ホールと、近代の男が求めて止まないスポンテニヤスな享樂を、カフェーとダンス・ホールと私娼とを兼ね備へたこの本牧のホテルが、遺憾なく飽滿せしめてくれるのはこの故でありこの故にこの世界がまたあらゆる近代人、コスモポリタニストを吸ひつけて止まないのであらう。

コスモポリタニストと言へば、彼女達が既に素晴らしいコスモポリタニストである。或る彼女は、東京—大阪—神戸—函館—小樽—横濱と、これを五年間に巡遊してゐた。或る彼女は、横濱—上海—シヤトル—ロサンゼルス—ハワイ—横濱と、それを七年間に漫遊してゐた。さうして、

「こゝん家の借金をさつさと脱いで、また上海へ行くのよ。上海が世界中で一番面白さうな街ね」

と言つてゐた。

彼女達は、英語を可なりの程度まで自由にしやべる外、支那語、ロシヤ語、フランス語

たまにはイスパニヤ、トルコ語なども知つてゐる。客が、それ等世界中のセーラーだからである。

或を夜更けのこと、女闘の扉を鎖してから、その扉を靴先で蹴飛ばしながら侵入しようとする或る外人に向ひ、或る彼女は二階の窓からこんな風に叫んでゐた。

「駄目よ。もう遅すぎる。ノー、ノー、ネヴァー。ノールーム、ノーガール、オール、クローズ、アップ。プリーズ、ゴー、アヰー、駄目だつたらさアー……」

こゝに奇怪不思議な種類の客が出入する。それはセーラー・バンツにハンチング、もみあげを長く伸して、いつもチュエンガムを嚙んでゐる。無職であるが、無一文でゐることはない。彼等こそ、日本女と米人との混血兒、日本男とロシヤ女との混血兒、ロシヤ男と支那女との混血兒、日本男とアメリカ女との混血女、トルコ男との間に産ました混血男——さういふ種類の彼等である。

彼等は「愚連隊」と總稱されてゐる。卽ち不良群のことである。まことに彼等はその名

に恥ぢず、東京の淺草や新宿を根城とする日本人の不良青年とはまた一種變つた凄い不良である。

彼等は、英語、ロシヤ語、支那語、トルコ語を自由自在にしやべるのみならず、江戸ッ子のベランメーを江戸ッ子以上のベランメーロ調でしやべり立てる。

「おゝ、マダム！……ウイ、ア、オー、ブルヂョアー……おい、ウオッカを飲ましてくんなよ。ゼニあいくらでも拂ふつてことよ、チエッ！　デヴル……」

彼等の或るものは、いつも上衣の内ポケットに、ジャックナイフか短刀を呑んでゐる。そして全く無意味に噴嚏をしかけて行く。理由を強ひて言へば、彼の好きな女を横領された場合などである。彼等はすぐ刄物を取り出す。命知らずの點では、淺草や新宿邊の不良以上であつても以下ではない。最近の例で言へば、この一月と、昨年の十一月と二度、大丸谷と、小湊のホテルとで、相手に致命的の傷害をあたへた事件があつたといふことでも想像できるであらう。

この種の混血兒が何故不良となるか？　それは今更説明する必要はなからう。彼等の成

長と教育に、責任を持つところの父親がないからである。或ひは母親がないからである。或ひはそのどちらも無いからである。彼等の父と母とは、最もながく共棲してゐたものでも、三年以上ではなかつたといふのであるから。

或る彼女はかう言つてゐた。

「らしやめんになれば、そりや貴婦人のやうな生活が出來るけど、せいぐ長くて三年ぐらゐでせう。その後が困るのよ。人間はじだらくになるし、からだはやくざになるし、まるでつぶしの效かない人間になつちやうからね。それに若し子供でも出來れば、羊が狼の子を持つたやうな目に會はなければならないものね」

さうしてこの狼の子が成長して、その餌食を漁りはじめると、彼等は悉くこの明るい暗黑街のホテルへ集るのである。大丸谷、小湊、十二天、本牧と、合計三十有餘軒はあらうホテルと、それに集喰ふ凡そ三百人の彼女等とそれ等へ夜毎に五月蠅なす各國のセーラー紳士の一千人とは、彼等狼連に取つては、この上なしの御馳走だからである。のみならず、

この世界は、あらゆる意味でのリベラリズムを徹底せしめた、全くの治外法權地であるだけ彼等がその牙をみがきその爪を立てゝ、己れの貪慾を飽滿せしむるに何等の障害もないからである。卽ち彼等が悉く此處に集る所以である。

玆に警告して置く。この世界へ出入せんとするものは、この狼の群が横行してゐることを十分承知の上で、尙更らに、生命の一つ二つを惜しまない覺悟であることを。

さて最後に於て特に報道せねばならぬ一事がある。それは右の狼の群を、猫の如く手馴づけて自分の手足の如く支配し、時にテキ屋の所謂「スケット」を働かしめ、表面羊の如くその實虎の如く、横濱と東京とを跨にかけて悠々濶歩してゐる彼女等の一群に就てゞある。

彼女等も同じく、三十有餘軒のホテルの中に散在して、唄とダンスと肉とを賣つてゐるのであるが、一週に二日乃至三日の太陽の輝く日を選び、その商賣區域を街頭に迄擴張するのである。卽ち、横濱の伊勢佐木町は愚なこと、省線で鶴見の花月園へ、更に新橋へ

來て銀座へ、日比谷へ、帝劇へ、邦樂座へ、更らに新宿へ、武藏野館へ、また更らに、都下のあらゆるダンス・ホールと喫茶店へ、またまた更に都下のあらゆる競技場へ、といふのである。

何故さうするのか、何故さう出來るのか？　彼女等は混血兒だからである。或ひは生粹のロシヤ娘だからである。その故にその途方もない稼ぎによつて、ホテルの主婦には一文の借金もなく、從つてホテルとは共同營業をしてゐることになり、從つてまた、行動は少しも束縛されることなく、全く自由自在にホテルを出入出來る身分だからである。しかしこれが、日本娘の出だと、どう變裝を凝らしても、見る人が見れば一目瞭然、チヤブ屋の女と見えるのだが、彼女等は、混血兒であるだけ、或ひは純粹の外人であるだけ、口紅をひとつ消しただけで、立派な外國貴婦人と化けることが、少なくとも、日本男子の眼の前では、そのやうに化けることが出來るからである。

かくて彼女等は、街頭に於いて、電車のなかに於いて、喫茶店に於いて、映畫館に於いて、競技場に於いて、最も手近な青年壯年の紳士諸君へ、恐ろしく慇懃なチェスチュアを以

て何かを話しかけるであらう。やがて、彼女へ腕を貸して共に散歩することを欲求するであらう。

もし諸君がかういふ場合に出會して、そして鞠躬如としてその腕を貸したとすれば、やがて諸君は、その全財産と全生命とを貸し與へねばならなくなるであらうことを保證する。

最近、ステッキ・ガールの出現に依つて、その好奇心と、警戒心とをそゝり立てられてゐるであらう多くの青年紳士も、かういふ種類の、ステッキ・ガールが、都下のあらゆる段階に出沒してゐることには、あまり氣づかぬであらう。時代のテンポは、一日毎に倍加して行く。

以上の世界と共に、東京北郊に於ける暗黑街をも描寫すべきであつたが、これはその必要を認めないので略すことにした。

何故なれば、北郊に於ける彼の二ケ所の暗黑街に並ぶ和製の安ホテルは、その數約一千

戸、そこに咲く花の數が二千人、この周圍に群集する善男の群が一日平均六千人、一ケ月十八萬人、一ケ年には百九十八萬人といふ數に上るからである。さうして常に時代の尖端に立つて潛行運動に怠りない諸君が、この莫大な數の中から漏れてゐる筈はなく、もしさうならば、その諸君はこの方面の事情に就ては筆者の先輩であつても決して後輩ではない筈だからである。

ドナウ・ホテルの殺人

一

時は、二月十二日の夜、厳密にいへば二月十三日の午前零時より零時半の間、場所は、横濱の場末、海岸の裏通りのドナウ・ホテルの二階の一室、そこに於て一つの殺人事件が起つた。

被害者は、岸壯一郎といふ青年紳士、東京山ノ手に棲む富豪の主人で、年齢三十五歳。彼の咽喉を絞めた十番の鐵線が、肉の中にめり込んで、その兩端は稻妻形になつて彼の胸の上に突つ立つてゐた。

横濱の場末、海岸の裏通りのホテルといへば、そこを傳へ聞きにしてゐるものにも、凡そ想像がつくであらう。そこには、ドナウ・ホテルの外、Mホテル、Uホテル、Hホテル、Dホテル、Sホテル、Nホテル、Kホテル等、大小併せて二十數軒の洋館、バラックが、三間道路をはさんで軒を並べ、酒とダンスと人肉の市場をひらいてゐる所である。世界中

の港々に必ずある一つの治外法權地で、人間の煩惱を飽滿させることに於ては、全く無制限であり全く無障害であるところの天國と地獄の世界である。情慾の生命を亂舞させるために、神より與へられた生命を抵當として、生と死の境界を大洋を見る如く取り拂はうとする人々の集る場所である。

さういふ場所に於て、一つの殺人事件が起つたのである。これには少しの不思議もなく むしろ當然あり得べきこととして、吾々は特に驚く必要はない。只一つ、こゝに不思議と思はれ、驚くに足ると思はれることは、その被害者が、岸壯一郎氏であるといふことであつた。

何故といへば、彼の境遇から見て、彼の日常生活狀態から見て、殊に彼の趣味から見て、彼は絕對にさういふ場所へ足を踏み入れる男ではなかつたからである。一例を言へば彼の趣味は、建築と讀書と古代彫刻の蒐集に終始してゐたといつていゝ。その凝りやうはその財力と併せて殆んど無際限であつた。彼の棲む屋敷は、高臺と谷とを含めて凡そ七千坪あり、松林と椎の森と花欄の林と、芝生と花壇と溫室と、それらの中に彼は、再度の歐

洲旅行から得て來た建築趣味に依つた、イタリー・フローレンスのルネサンス建築——オスペダーレ・デグリ・インノセンチ院を模したものを建てた。彼には子供がなかつたので、夫人と共に(B男爵家から嫁した人)四人の女中と三人の園丁を傭つてそこに棲んで見た。が、實際に棲んで見ると、小規模なだけ、本場のインノセンチ院の圓柱と廻廊の朗らかさはまるで味へず、彼は苦笑して、數年にしてその大部分を毀ち、その後へぐつと新らしくライト式の家を建てゝ見た。が、これにはすぐ飽きて、今度は松林の一隅へ、足利時代の建物——慈照寺銀閣の型を取つた家を建て、前の谷を利用して、相阿彌の作と傳へられる銀閣の林泉を模した庭園を、三年がかりで造つた。が、これも豫想の十分の一の味も出さうもないので、最近これにも厭氣がさし次の新規な建物を考案中だといふことであつた。

他の趣味の凝りやうも推して知るべきである。要するに、彼の兩親の沒後、これまでの十數年間の彼の生活は、それらの趣味を次から次と間斷なく、また限りなく追ひ味はうとすることのみに埋められてゐたと言つていゝのである。

しかし、漁色家としての彼はどうであつたか。人に依つてはこの問題ばかりは、外の凡

てと切り放し、全く別問題として考へねばならぬことであるが、これは、彼が、親ゆづりと同時に富豪子弟共有の性癖から、極端なる潔癖家であり、極端なる嫌人家であつたといふことで、その程度がはつきりする。人を嫌ふこと、殊に女を嫌ふことでは寧ろ病的といつてもよかつた。彼は、口紅を嫌ひ、耳かくしを嫌ひ、抜衣紋を嫌ひ、薄ものの羽織を嫌ひ、色つきのパラソルを嫌ひ、その身につく桃色を嫌つた。桃色を嫌ふことは分けてもひどく、彼は草花にすら桃色のあることを呪つた。で、この嫌ひなものを一つでも身につけ得々としてゐる女と相對することがあつたりすると、彼は終日胸惡がつてゐたほどであつた。

「漱石はどういふ理由で他の女に接しなかつたか知らぬが、僕には、妻以外の女は凡て汚ならしく、傍へ寄ることすら出來ない。その意味で、僕は漱石以上女房孝行だよ」と彼はよく言つてゐたほどである。また或る時は、

「妻すら無性に汚ならしく感じ、同じ部屋にゐることにも堪へられないことがある」とも言つてゐたほどである。

この感覺から彼は、トルストイやストリンド・ベルクやモウパッサンや、ダヌンチオなどといふ人間——女性に對し異常な關心を持つた男が曾て存在したそのことをも憤つてゐた。第一肉慾的なあれらの顔が見るに堪へないといふのであつた。

このやうな彼が、彼の嫌ひ呪ひ憤るもののみで埋まつてゐる横濱のホテル、しかもその種のホテルでも中以下のオールナイト〇〇エンといふやうなドナウ・ホテルへ、何故にまた如何して現はれたか。これが先づ一つの大きな謎であるのに、その彼がまたそこで最後の呼吸を止められてゐたのである。これは寧ろ滑稽なほどあり得べからざることで、彼のたつた一人の親友烏山が、

「鯨が箱根の山に死んでゐたやうなものだ」と言つたほどであつた。若し彼がこれを聞いたら、この友を揶揄るだらうと思はれるほど面白くもない言ひ方であるが、これがこの場合の感じを一面現はしたほど、この事件は全く馬鹿々々しく不思議な事件であつたのである。

しかし、事實は飽くまで事實である。そして吾々は、この事實を前にしては、何故に如何して彼がこのやうな場所へ現はれたかを詮索する前に、何者に依つて如何にして殺され

たかを先づ見極めねばならない。

二

この夜のこのホテルに於ける岸氏の相手の女は、ゆき子といふ混血兒に見るやうな顔とからだつきを持つた二十三の女であつた。

彼女は、この夜ウヰスキーに醉ひ、まるで狂人のやうに喜び勇み、錦紗の裾をスカートのやうにひろげ、十坪ほどのダンスホールの中を、壁から壁へぶつかりながら相手構はず踊り狂つてゐた。岸氏が二階のベットの上で殺された時刻には、彼女は、サンフランシスコ生れ、上海と横濱育ちのアメリカ青年と、夢中になつてチャールストンを踊つてゐた。

「ゆきちやん、いゝ加減で寢て頂戴よ。大事なお客さんをおつぽらかしといて、まるで氣違ひだ」

おかみが、隣室の酒場のスタンドからさう叫ぶと、ゆき子はげら〳〵笑つて、

「いやーだよ。あたしやこの人と夜明し踊るんですよ」と呶鳴つて、アメリカ青年にかじりつき、延び上つて、その桃のやうな赤い、むく毛の生えた頰つぺたへ無闇と接吻する。

アメリカ青年は喜んで鷲鳥のやうな聲を立てる。

おかみは舌打ちし、

「あいつの馬鹿にも呆れるよ」

その三十分ほど前である。岸氏は、ウヰスキーとヂンをちやんぽんに飲み、もう頭も上げられないほどに醉つて、ストーヴの前の椅子にぐつたりとなつてゐた。この時、ゆき子はショートタイムの客の相手となつて、二階の部屋へ引つ込んでゐた。おかみは幾度かゆき子を下へ呼んだが、ゆき子はつひに出て來なかつた。止むを得ずおかみは、自分で岸氏の手を執り、二階の一室へ案内した。岸氏はベットの上へ倒れると——あとであの混血兒さんに水を持つて來さしてくれと苦しさうに言つたのである。

おかみは今、それを思ひ出し、ゆき子へ向つてさう叫んだのであつたが、さういふ有樣のゆき子を見ると、自分でその用を足してやる氣になつた。かういふ用事は、大抵の場合

相手の女が、少女にさせるのであるが、今、水を運んでやらうとする客は、貴公子のやうに美男で、また途方もなく金ばなれがいゝので、特別の待遇なのである。二重顎の色白のでつくり肥つたおかみのからだは、蟹の肉の味だ。このホテルの七人の抱へ子のどの女も持ち合せてゐないものを持つてゐる。ビール一打と二晩分の金に依つて、一つお願ひは出來ぬものか、と眞顏で申し出る客が十人のうち、二人はあるので、おかみはそれを密かに自負してゐる。で、今、もしあの客がそれを申し出たら、前例を破り、ブライヴィトとして實現して見てもいゝと、おかみはウヰスキーのまはつた胸の中に考へながら階段を上つて行つたのである。

客の部屋は、中廊下の突き當り、東と南に窓を持つた二坪半ほどのリノリーム張りの部屋であつた。ノックする迄もなく、ドアは三寸ほど開いてゐた。おかみは足の先でそれを押し開き、

「お待ちどうさまでした。お一人でお寒いでせう」と、お盆をティー・テーブルの上に置きながら客の方を見て、あつ！　と叫んだ。

客はダブル・ベットの下の床の上に仰向けに倒れてゐる。胸の上に、二本の太い針金が稲妻形に突き立つてゐる。片手は横に眞直ぐ突つ張り、片手は、掛布團の眞赤な縮緬模樣を摑んでゐる。その顏は蒼白に、口は歪んだなりにかたく結んでゐる。

おかみは椅子を蹴倒して、ドアの外へよろほり出た。廊下から階段をころがり落ちた。ダンス・ホールのドアを開き、叫ばうとした瞬間、おかみは本能的ともなつてゐる商賣意識にぐつと制せられた。おかみは眼の光りへ凡てのものを集中して言つた。

「ゆきちやんー　さつさとおいでよ！」

踊り狂つてゐたゆき子も、その聲には目が覺めたやうにぎくりとした。彼女はアメリカボーイの頰へもう一度接吻して、よろ〳〵とおかみの方へ寄つて行くと、溺死しようとするものが岩にすがりつくやうに、おかみの硬い圓い肩へ凭れかゝり、熟柿の息を吹きかけながら、

「マヽさん、ごめんねえ！」

おかみは、ゆき子を廊下へ引き出すと、ドアをばたりと閉め、

「ゆきちやん、冗談ぢやないよ。お前さんのお客が、死んでゐるよ！」
「何ですつて、おかみさん―」
「大きな聲をお出しでないよ。外のお客に聞えるぢやないか」
ゆき子は、五足で階段を飛び上り、部屋へ入ると、死人の顔へ自分の顔を引き寄せて、瞬間ぢつとした。が、そのまゝぢり〳〵と後去りし、壁へ背中をはりつけると、恐い眼付でぢつと死人の顔を凝視した。
死人は眼をうす眼に開け、下唇を喰ひしばつてゐる。下顎に鮮血が二筋、すいと流れて咽喉に垂れてゐる。針金は、その咽喉を巻いて肉の中に喰ひ込まり、咽喉佛の所で一ねぢりぎりゝとねぢつてある。
ゆき子は、片手をあけて眼を蔽ふやうなことをしたが、そのまゝ崩れるやうにばたりと倒れた。おかみが傍から支へようとしたが間に合はなかつた。ティー・テーブルが倒れるその上のフラスコとコップが床の上にはね返つて割れる。その物音に小女が走り込んで來る。事件はすぐに下のホールへ傳つた。

三十分しないうち、他の六人の客は、ダンスホールにゐたものは眞先に、ベットへ入つてゐたものも、音も立てず身仕度をして、影の如く素早く、往來へ消え去つてしまつた。
更らに三十分しないうち、二臺の自動車が玄關前へ止り、五人の刑事、警官が、冷たい風を酒場の中へ持ち込んだ。そして六人の女は三人の警官に看視されてホールへ監禁され、おかみと小女は自動車でY署へ送られた。ゆき子も署へ運ばれる筈であつたが、殆んど意識を失つて倒れてゐるので、ホールの隅のソファーに寢せられたまゝであつた。非常線はすぐに張られた。
その翌朝になり、嫌疑者として三人の大工と二人の左官があげられた。この五人の職人は、事件のあつた部屋の窓から三尺と離れないHホテルの新築場に働いてゐた者である。被害者の咽喉をしめた十番の鐵線は、その新築場の足場の丸太を結へたものと全く同じものであつたがためであつた。更らに夕方までに、八人の嫌疑者があげられた。出入りの商人、及びこのホテルの常連の或るものであつた。
けれど、これより三日の後、これ等嫌疑者は凡て解放された。他に犯人があがつたから

である。作者はこゝで探偵小説を書くつもりはないので、その犯人をこゝで知らしてもいいのである。

犯人はゆき子であつた。

ゆき子は、卒倒してから二日二晩のあひだ、夢魔に襲はれてゐるやうな眠りをつゞけ、三日目の朝になり、漸く意識を回復すると、一刑事の訊問に應じて、

「私が殺しました」とはつきり言つたのである。そしてそれまでのいきさつを明細に述べ立てたのであつた。

三

以上の描寫に依ると、ゆき子が犯人であることが餘りに唐突のやうに思はれる。犯人どころか、この殺人事件とは何のかゝはりもない人間のやうにすら思はれる。最初の訊問者の刑事すら、はじめはさう思つたほどであつた。だから若し彼女が眞犯人であるならば、

以上の描寫が全然虚僞であるとも思はれる。

しかし作者は、虚僞の描寫に依つて讀者をたぶらかす必要は何處にもないのである。凡ては事實の描寫である。只以上は半面の事實の描寫であつたのである。他の半面——彼女が何故に如何にしてこの事件を起したかの事實の描寫は凡てオミットしたのであつた。

何故さうしたか？　それは今玆で描寫することが、全く無益徒勞に終るからであつた。それほど、以上の結果的事實の中に織り込んで同時に描寫することが不可能であるほど、この事實には、彼女と被害者岸氏の歴史的過程が含んでゐて、そこから生れた不可思議な心理と感覺との交錯した事件であるがためであつた。これから作者はこの事實を描寫する段取りを取るのである。

玆で問題は自ら、始めの問題——岸氏が何故に如何してこのドナウ・ホテルの如き場所へ現はれたか？　そしてまた、何故にどういふいきさつを經て、一人の賣女ゆき子の如きものに殺されたか？　といふ二つの問題の詮索にかへつたわけである。

これより丁度一年ほど前、二月上旬のある午後のことであつた。岸氏は一人、書庫の肘掛椅子に凭つてぼんやり煙草をふかしてゐた。書庫とは、既に大部分を取り毀して、今は二階と階下の一間だけ残してある例のインノセンチ院を模した建物の二階であつた。窓のステインド・グラスを通した橙色の光が、高い圓天井の下にほのかにあたゝかい色を漂はしてゐる。彼はこの色を愛し、この色に包まれて讀書する氣分を愛してゐた。この部屋を書庫としたのもそのためであつた。

橙色の光が鼠色に變りそめた夕方近くであつた。彼は、階段の下に人の跫音、それも忍び足の音をふと耳にした。つゞいて何か囁き合ふ二人の聲を聞いた。彼は直覺的に、或ることを感じた。彼は立ち上り、忍び足に階段の下り口まで行つた。そして半圓を描いて下つてゐる階段の下を覗いた。と、二人の男女の影がちらりと見えた。女の白いうなじと、男の太い二の腕が、下半身、觀音の立像のかげに隠れてちらりと、しかもはつきりと見えた。——（その部屋は、彼の趣味の一つである古代彫刻のコレクションを置いとく庫になつてゐたのである）それを見た瞬間、からだ中の血がかつと湧き立つやうな昂奮を彼は感

じた。つゞいて彼の極端な潔癖性がむら〳〵と傷いた。

「汚ない！」さう叫ばうとして口を開いたとき、彼は言葉を一つ一つなげつけるやうにかう呶鳴つた。

「だれだ！　待て！　動くな！」

彼は階段を走り下りた。そこには女中の澄と、園丁の定吉が、肩を縮めて立つてゐた。彼は拳を固めて、定吉の耳をなぐりつけた。定吉は二三歩よろほつて辛うじて立つた。彼はつゞけて、澄の胸倉を力一ぱいに突いた。澄は、背後の觀音像に突き當り、それと一緒にばたりと倒れた。觀音像の胴が澄の胸の上へ折り重なつた。

彼は昂奮のあまり口がきけなかつた。彼はさういふ澄と定吉を尻目に憎々しく睨めてから、階段を跫音高く登つて來た。再び肘掛椅子へ身を置いたとき、彼は胸の動悸が自分でも恐ろしいほど大きく鼓動してゐるのを感じた。彼は、書架の隅に備へつけてあるオーソーテルヌ酒を取り、銀カップへ溢らしながら飲み乾し、再び椅子へ凭れた。

階下からはしばらく何の物音もしなかつた。が、やがて何かを引きずるやうな音がして

それが部屋の外へ消えた。それは、倒れてゐる澄のからだを、定吉が外へ運び出したのであらう。

三十分ほどした。と、再び階下に跫音がし、それが階段を登つて來る。彼はまた立ち上つた。が、すぐに、その跫音は友人鳥山であることに氣づいた。彼は腰を下し、何故か慌てゝ煙草に火をつけた。

鳥山は、帽子も外套もつけたまゝ、黒坊主といふ感じで、眼鏡を寒さうに光らしながら彼の卓子の前へ近づいて來た。

「君が、この部屋にゐるのは珍らしいね」

「あゝ、二週間ぶりだ」

彼は強ひて平明な表情で平明な聲を出さうとした。

「何か面白い讀み物でも見つかつたの？」

「いや、なんにもありやしない。それより今日はこゝで、素敵な事件にぶつかつちやつた」

「何だね？」

「うちの園丁と女中の奴が、この階下で逢引をしていやがつた。近頃僕はこの家を空巣にしとくもんだから、いつの間にかあいつ等が巣を喰つてたんだね」

「それで君はどうした？」

「二人を、力限りなぐつてやつた」

「それから？」

「それきりさ。女中の奴、怪我をしたかも知れない」

「どうりで、君はいつになく昂奮してゐると思つた」

「それが君にも解つたかね？」

「一目見てすぐ解つたね。とにかく君にしちや勇敢な行爲だつた。だが、そいつを奥さんには言はん方がいゝぜ」

「なぜだ？」

「奥さんは、君の言ふ通りを正直に取りやしないからさ。事件が事件だけに」

「さうかな……なるほどさうかも知れぬ」

鳥山は、書架から一册の本を引き出し、彼と反對の北窓の下のソファーへ行つて讀みはじめた。

彼は、今の鳥山の言葉から、先刻の自分の勇敢な行爲を内省しようとした。しかし彼には、彼の一徹の憤怒が、主人として爲すべきことを爲さしめたのだ、といふ風にしか考へられなかつた。

が、しかし、時間が經つにつれて、この一徹な憤怒が薄らぐにつれて、その後に、一つの不快な暗い滓が殘つた。そしてそれはだん〳〵と色濃く重くなつて來た。それは彼自身にも說明しようのないものであつた。

その夜彼は、夢で、澄を冒した場面を見たのである。彼はその夢の中で、昨日の暴力以上の暴力を敢てした。これは實に堪らない不快な氣持であつた。定吉が澄に向つてしたやうなことを彼自身が普段に無意識に、澄に對して感じてゐたのだ、といふことをはつきりと裏づけたやうなものであつたからである。

事實、正直を言へば、彼はこの一年以來、澄に對し、意識的にも無意識的も、或る心情

を動かしてゐた。彼の嫌人癖がこの女に向つてはさう露骨に働かなかつたのである。

意識的に動く場合は、同時に彼の潔癖性が働いて、常に無事に濟んだが、無意識に動く場合は、後で考へてぞつとするやうな危機を彷徨した。澄が、彼のために何か用を足して引き下らうとして頭を心持ち下げたとき、彼の眼が、ふと澄の白いうなじに止ることがある。そのうなじは、彼の妻にも曾てなかつた美しさを持つてゐた。彼はそれに或る惱ましい魅力を感じた。瞬間彼は、ある暴力的本能力に全く支配されることがあつた。

彼の妻には、砂のやうにさら〳〵した感情と、クレーブ・ペイバーの人形に見るやうな乾いた美しさしか殘つてゐなかつたが、澄には、葉牡丹を見るやうな粗野な水々しさと生氣に充ちた柔らかさとがあつた。この感覺は、澄を眼の前に見ない場合にも、常に彼の心情を刺戟してゐた。さうして、彼は一人で顏を赤らめるやうなことを空想した。その空想の中でも、彼は暴力的行爲を敢てした。

昨日、定吉と澄との逢引を見て、彼としては生れてはじめての暴力、またさういふ二人を主人として制裁するには可なり常軌を逸した暴力を振つたのも、この暴力的本能の一つ

の變形であつたのである。

朝食を濟すと、彼は憂鬱な面を伏せて、例の書庫の家へ入つて行つた。階段の登り口で彼の足はひとりでに停つた。彼の眼には、そこへ倒れた昨日の澄のあられもない姿態がはつきりと映つたのである。彼は最早主人としての立場から、彼等二人を裁決しようといふやうな考へを殆んど忘れてゐた。

彼は、書庫へ上ると、南面の窓際のソファーに身を沈めて、ぼんやりと煙草をふかしてゐた。殆んど三時間を彼は身動ぎもせずさうしてゐた。拂つても拂つても、不快な妄想が次から次と腦裡をかき亂す。

と、階段を登る跫音がして、昨日の烏山が入つて來た。

「近頃また勉強家になつたんだね」烏山は少し皮肉な調子で言つた。

「あゝ」と彼は答へたが、しばらくして「實は、この一年、僕は一頁の讀書もしなかつたよ」と寂しく言つた。

「でも、ときゞこゝへこもつてゐるぢやないか」

「讀書をしてゐるんぢやないよ。近頃何だか、何處にゐても落ちつかないことがあるのでそんな時、こゝへこもつてゐるのだ」

「なるほど、こゝならそれには持つてこいの所だね。まるで廢寺の中だからね」

「廢寺はひどい、とにかく落ちつくよ。しかしあんまり長い間こもつてゐると、今度は頭がうんで來るやうな氣がする」

「それもありさうなことだね」

「四五日前僕は、隣の家（今は棲む人もなく荒れ果てたライト式の建物）へ入つて行つて親爺のかたみの馬車を見たのだ。君に話したかどうか、あれは親爺がパリの日本公使館を引き上げるときに、二頭の馬ともに買つて來たものだが、今はほこりまみれになつて棄てられたやうにしてある。あれを見てゐるうちに、僕はふと、死んだ親爺の剝製を見てゐるやうな氣がして來たのだ。それ以來僕は、餘計に暗い落ちつかない氣持に囚はれてゐるのだ」

「さうかね、いや、さうだらうね。君のやうな生活をしてゐる人間が、今の時代に存在し

てゐることは、むしろ不思議なくらゐだからね。何かに對する冒瀆のやうな氣さへするからね」

「それはどういふ意味だ？」彼は少し不機嫌に問ひ返した。

烏山は何も答へず、彼の面を冷たく見てゐたが、

「昨日の事件はどうなつたね？」と何かを探るやうに言つた。

「あれきりだ」

「行つて見てやらないのかね？」

「あゝ」

「少々無責任だな」

怪我をしたかも知れぬ澄を見舞つてやらないのが無責任なのか、彼等二人の問題を解決してやらうとしないのが無責任なのか、彼はそれを訊きかへさうとして、

「僕は、十年この方、女中達の家へ足を踏み入れたことがないからね」と答へた。女中達の家とは、例の銀閣を模した本屋から渡り廊下によつてつゞいた別棟の家で、そこに四人

の女中と二人の園丁とは、岸家に三十年あまり仕へてゐる或る老婆の監督の下に寢起きしてゐるのであつた。

「それで濟むなら結構だが」烏山は獨りごとのやうに言つた。

「……」彼はそれに答へなかつた。

と、再び階段を上る跫音がした。彼は椅子から身を起し、神經質な視線を階段の方へ注いだ。現はれたのは、園丁の定吉であつた。定吉は、デンドロビュームの鉢を兩手に捧げてゐた。彼は默つて卓子の隅を指した。定吉は近づき、示された場所へ鉢を置くと、しやんと立ち、

「後ほどで結構でございますが、少々お願ひがあります」と言つた。兵隊口調である。

「今そこでいへ、昨日のことだらう？」

定吉は烏山の面をちらと偸み見てから、

「はッ、實は、お澄さんがひどく發熱しまして、醫者を呼びましたところ、入院する必要があるといはれましたもので」

彼は椅子へ身を沈めて、煙草を取つた。マッチを摺つて火をつける手が少し顫へてゐる。
「……さうか。ぢやすぐ入院さしたがいゝ。奥さんにもその事を話したのか？」
「はッ、婆やさんから話していたゞきました」
「どういふ風に話さした？」
「急に發熱しましたから、とだけ申し上げてもらひました」
「その時の奥さんの返事は？」
「そりや、流行の悪性感冒だらうから、すぐ入院させるがいゝとおつしやつたさうです」
「醫者もさう診斷したのかね？」
「醫者は、急性肺炎になる恐れがあるといひました」
「澄は、今も苦しさうかね？」
「今日はこん〳〵と眠つてゐます。ゆうべは夜通し、囈言ばかり言つてゐたやうです」
「もう、よろしい」
「それで……」

「解つてゐる。入院料のことだらう。その點はちつとも心配するなと言つてやれ。その他物入りがあつたら、すべて僕へ直接いつてくれ。奥さんへ言つてはならぬぞ」さう言ひ切つて彼は險しい眼をした。

定吉は、お辭儀をして、階段を下りて行つた。

鳥山は椅子から立ち上り、部屋のうちを歩きはじめた。ときゞ〳〵眼鏡を冷たく光らして彼の方を見る。それは何か言ひ出さうとして、或る適切な言葉が探し出せないでゐるといふ風に見える。彼は、さういふ鳥山が薄氣味惡くなつた。

彼は、何かを追ひ拂ふやうにいきなり立ち上り、

「鳥山君、今日は失敬するよ。僕はこれから或るところへ行かねばならぬ」と言つた。

四

四十分の後、彼は愛用のピーヤス・アローを自ら運轉して神宮外苑の芝生に沿つた道を

靜かに走つてゐた。煙に卷かれたものが、晴れた新らしい空氣を求めるやうにして彼は此處へ來たのであつた。

外苑の芝生はあつらへ向きに、からりと晴れた空を映して、遠く遙かに澄み渡つてゐた。彼は全裸體になり、その芝生の中を思ひきり走り廻りたいやうな衝動に驅られた。

彼は靜かに車を進ませてゐた。と、その二十歩ほど前を、一人の若い外國婦人が歩いて行く。光る黑毛の外套に、淡紅色の帽子をかむり、春草の莖を想はせるやうなすらりとした薄みどりの脚を現はして、こつ〳〵と歩いて行く。彼は自分の庭園の池に飼つておく愛禽の鷸をおもひ出してゐた。

彼の車が、彼女の五六歩あとへ進んだときである。彼女は、靜かにふりかへり、彼の方を流し目に輕く見たが、ふと彼の車を遮るやうに近づいて來て、

「Voulez-vous bien me prendre à la gare d'Sato?」（恐れ入りますが、私を、驛までお送り下さいませんでせうか）と、言つた。明らかなテノールである。

彼は車を停め、一寸返事にまごついた。彼女の言葉が、彼の豫期しなかつたフランス語

であつたのと、その申し出が少し意外であつたからであつた。が、彼はすぐ答へた。

「Volontiers!」（どうぞ）

彼が手を延べて座席のドアを開けようとすると、彼女は、

「Non, monsieur, je me contente de ce siège.」（いゝえ、わたし、こゝで結構でございますわ）と言つて、運轉臺へ彼と並んで坐つた。坐るとき彼女は彼の面を見て、薔薇の花のやうな微笑を浮べた。彼は、その微笑と同時に、外遊以來忘れてゐた外國婦人の或る特種な香りを總身に感じた。

彼はふと、パリの郊外をドライヴしてゐるやうな氣持を感じて、外苑の風景がまた不思議とその氣持に調和した。

さういふことから、また相手が外人であることから、彼の嫌人癖はこゝで働くひまがなかつたのである。

彼は靜かに車を進めた。進めながら、

「Êtes-vous pressée, madame?」（お急ぎですか?）と訊いて見た。（以下、彼と彼女の對話

は凡てフランス語であるが、飜譯語だけを書いて置く）

「いゝえ」と彼女はまたふつくらと微笑して、「わたしは今日、こゝのグランドヘラグビーを見に來たのですが、疲れたので中途で出て來たのです。それにひどく寒いもんですからついあなたにこんなお願ひをしたのですわ」

何年ぶりに、このなめらかな言葉のリズムを聞いてゐるうちに、彼の氣持は、いつか明るいスポンテニヤスなものになつてゐた。ついつい先刻の煙に卷かれて窒息しさうになつた氣持は、跡方もなく消え失せてゐた。眼の前が急にパッと明るく突き拔けたやうな感じであつた。

この感じは、彼の外遊後三年間に、只の一度も味つたことのないものであつた。

彼のピーヤス・アローがお濠端に沿つて日比谷の方へ疾走してゐた時分には、彼は今までになかつた新らしい別の人格へ乘り移つてゐる自分を感じた。そして彼はこのことを不審とも思はなかつた。彼は元氣な聲で言つた。

「もし、お急ぎでなかつたら、夕食をおつきあひしてくれませんか」

「えゝ、ありがたう。よろこんでおつきあひしますわ」

彼は、少しでも彼女を喜ばせようと思ひ、日本橋のK園を選んだ。二十分の後、二人はそこの一室に坐つてゐた。彼女はお世辭らしくもなく、障子をよろこび、襖をよろこび、床の間をよろこび、掛幅をよろこび、紙框に包まれた灯をよろこんだ。

彼はそこでやうやく彼女の顏をしみじみと見た。それはフランス人にしては、少し固い輪廓を持つてゐた。眼の凹み方顎の形がロシヤ娘を想はせた。しかしその唇は、ボインセチアの葉の如く赤かつた。彼はそれに或る神祕的な濃艶さを感じた。どういふ階級の女か、全然判斷がつかなかつたが、この場合彼に取つてそれは問題外であつた。

料理が出ると彼女は、上等の支那料理は、上等のフランス料理の三倍ほど美味であると言つて、芍藥の芽のやうな指先へ上手に箸をはさんだ。彼女は口を動かしながら、絶えずしやべつた。そしてやがてこんなことを言つた。

「わたしは、日本の方で、あなたのやうに上手にフランス語を話す方に出會つたことがありません。あなたはフランス育ちぢやありませんか？」

「いえ、そんなことはありません。只、僕の父と母がパリの日本公使館にゐたことがあるので、僕は子供の時分からフランス語を教へられたのと、一九二〇年に一度、一九二五年から七年へかけて一度、フランスを中心とした旅行をしたことがあるのとで、それで少ししやべれるきりなんですよ」

「おゝ、フランスは何處に住みました」

「リオンとパリ」

「パリは何處です」

「主に、ノートルダムに近いセイヌ河の岸に」

「おゝ、わたしもあの邊に暮したことがあります」

「僕はあの河岸の古本屋の爺さんと仲良しになりましてね、なか〳〵の東洋趣味黨で、今でもときゞ〳〵文通をしてゐます。つい四五ケ月前も、あの爺さん、日本の都會情緒を代表するものはおでんやの提灯ださうだから、一つ送つて見てくれと言つて來ましたよ。こいつには笑つちやいましたが、構はず、一つ造らせて送つてやりました。すると爺さんすつ

かり喜んでしまつて、居間の天井へぶら下げて毎日眺めてゐる、と言つて來ましたね。あの赤い間ぬけた大きな提灯が、狹いくすぶつた部屋の中にぶら下つて居る所を想像すると僕はいつでもふき出してしまひます」

彼はすつかり調子づき、そんなことを實に愉快さうにしやべりつゞけた。彼女は更らに調子づき、

「ハッハヽヽヽ。そんなら今度は、日本の紳士が着る外套だといつて、印半纏を送つて上げなさいよ。そしたらその爺さんそれを着て得々然と、あのセーヌ河岸を歩き廻るでせうから」

二人はそこで大聲に笑つた。この調子は二人の行動を更らに思ひがけないものに移して行つた。そこを出て、女闘先へ置いといた自動車へ、彼女は彼より先へ乘りこむと、いきなりハンドルを握り、

「わたしにドライヴさしてね。そして今度はわたしに御馳走さしてね。これからある所へ行きますから」と言ひ出したのに對し、彼は、

「おゝ、ありがたう。よろこんで御馳走になります」と言つたのである。そして五分後には、N町通の或るビルディングの前へ來てゐたのである。

彼は、このあたりは、大震災後は勿論、その以前もいつの年に來たことがあるかを殆んど知らなかつた。彼の生活はどういふ點からも、このあたりとは没交渉であつたからである。それだけに、彼には生れて始めて見る都會の一部のやうな氣がした。それにK園での老酒が快く彼の眼をかすませて來たので、ふと、バリのラテン街をうろついてゐるやうな自分になつたのである。

彼は、彼女に導かれてエレベーターへ入つた。と、微かにジャズの音がきこえてエレベーターは止つた。

彼女は煙草に火をつけた。そしてくゞり戸のやうな小さなドアを開けた。突然、わッとジャズの音が風の如く彼等の總身を囚へた。つゞいてもやつとしたうん氣が流れて來た。彼はふら〳〵として、彼女の後に續いた。煙草の煙とうん氣と彼の醉眼とで、凡ては水底の如く見える。その中に、何十組かの男女が魚のやうにゆら〳〵と躍り廻つてゐた。

彼は、日本では始めて見る世界であつた。しかし彼は不思議と、何の驚きも感じなかつた。當然來るべき所へ來、現はるべき世界が現はれたといふ氣がしてゐた。つひ數時間前彼女と始めて會してしばらくして、彼はそれまでの煙に卷かれて窒息しさうな氣持の自分を全く忘れたのであつたが、今は、つひ數時間前迄の自分の凡てを全く忘れてゐた。

「よし、飽くまで踊るぞ！」と彼は叫んだ。

「どうぞこちらへ」とボーイが案内する。スチーム・タオルが運ばれる。ダンス券を買はされる。

「お飲みものは？」

「プレイン・ソーダ」

彼はポケットから何枚かの札を無造作に攫み出して、その一枚をボーイの手に渡す。ボーイは急にカメレオンのやうな顔をして頭を下げる。

彼女は、彼の肩にすり寄り、長い脚を高く組んで坐り、悠々と煙を吐いてゐたが、やがて唄ひ出した。

……

ラーヂビオミ　グッドレアヴ

ラーヂビオミ　ベリオーズ

アイダ〻　アイダ

　　アイダ〻　アイダ……

太陽と星の大旗がひるがへる。赤と青と黄の光が交錯する。そこから湧き立つジャズが、ホール一杯を引つ掻き廻して、彼女のテノールを踏みにじる。

「こいつ、船唄なんぞを唄やがつて、やつぱりソヴキットの百姓娘か」彼はそんなことをふと思ひ、それが更らに彼を愉快にした。彼は、ブレインソーダをぐつと飲み乾すと、「さア踊りませう」と立ち上つた。

「Ah! cher petit !」(おゝ、可愛いゝお坊ちやん!)

彼女は、眞赤な唇を大きく開けて叫んだ。そして黒毛のオーバを脱ぐと、乳房のふつくらと盛り上つた胸を押しつけて來た。瞬間彼は、さアーつと血液が逆流したやうに感じ、

額の汗を拭つた。

二人は、踊りながらホールの外側を廻つて行つた。只、赤い色、青い色、緑の色、淡紅の色が、ほやけた一團となつて金魚のやうに眼の前をゆれ泳ぎ過ぎる。しばらくして、白い顔が見えて來た。が、どれもこれも同じ顔に見える。みんなバリつ子の顔に見える。みんな眠を細めて陶醉した顔が、虹のやうに流れて行く。と、黒熊が立ち上つたやうな一組が過ぎる。外人の老夫婦である。お婆さんの腕にバックがぶら〳〵する。ローラー・カナリヤのやうなおしやべり聲が過ぎる。男の顔を顎の下に見下しながら九官鳥のやうな聲を出すヤンキー・ガールが過ぎる。鷲鼻に河童のやうな頭のドイツ紳士が過ぎる。

すると彼女が、ほてつた息を彼の耳朶に吹きかけながら囁く。

「あなたが倒れるまで踊りますよ」

「いゝえ、あなたが倒れるまで踊りますよ。ところで、あなたなんぞと呼ぶのは水臭い。名を言つて下さい」

「あゝ、忘れてゐました。わたしの名は、ヂャネット・ゲイナー、ぢやなかつた、そら、

カトレアヽヽヽ」
「カトレア！　何處かで聞いたやうな名だ。僕にダンスを敎へたパリのあの娘さんの名がさうだつたかしら」
「いやなことをおつしやる。そんな人の名とは違ひます。そら、花の名。メラコイデス、オブコニカ、エリカ、シクラメン、デンドロビユームなんどと一緒に咲いて、そしてそれらよりずつと仇つぽく狂ほしく咲く花。それがわたしの名ですわ」
「あゝ、わかつた。僕の庭の溫室にも咲いてる筈だ。白蓮に似て、もつと美しく、そしてたしかにもつと仇つぽい狂ほしい花」
「えゝ、それよ。素敵でせう。そしてあなたのお名は？」
「僕は、岸――キシといひます」
「おゝ、キッシ！」
「いゝえ、キ、シ、……キッシぢや、キッスと間違へる」
「ハヽヽ、間違へたら、なほいゝわね」

そこで二人は聲を揃へて哄笑する。彼は、彼女の心臟の鼓動を直接に感ずる。彼の心臟の鼓動は彼女へ直接に傳はる。そこには神祕と驚異の融合した夢が宿る。さうして彼は、これほどの夢は、彼の唯一の女――妻とすら經驗したことがなかつた。
ヂャズとレコード。間斷なく荒れ狂ふ騷音、フォックス・トロット、チャールストン、ワルツ、タンゴ……何十人かのダンサーが、ジャズ團のステージの下へ一列に、雀のやうに竝んでは散り、並んでは散る。さうして時は、時を超越して過ぎて行く。
彼はぐつたりと疲れて、ホールの隅の椅子へ凭れてゐた。彼女――カトレアは、まだ平氣で、鷲鼻と河童のやうな頭を持つたドイツ紳士と、ときゞ癇高く笑ひながら踊つてゐたが、やがて彼の傍へ來て、
「たうとうあなたが先に倒れましたね。ぢや今晩はこれでお別れしませう」と言つた。
彼は不足らしい顏をして、
「そして、これきり永久にさよならなんですか？」
「さうね」と彼女はドイツ紳士の方を流し目にちらりと見て、「ぢや、またお目にかゝりま

せうか」
「いつ？」
「さうね。來週の今日、夕方の五時」
「どこで？」
「T驛の婦人待合室で」
「きつとですね。間違ひありませんね？」
彼女は、口を尖らし、大袈裟に胸を撫で指を合せて十字を切り、
「死がそれをさまたげない限り」と言つて、彼を睨めるやうにして、につこりした。

五

その夜彼は、彼女——カトレアの夢を見た。ダンスホールはいつか彼の書庫に變つてゐる。そこで彼は例の暴力を奮ふ。彼女は力限り抵抗する。それが更らに彼を昂奮させる。

そして××××××後、カトレアはいつか澄に變つてゐた。
澄が再び夢に現はれたことは、彼をまた憂鬱にし、腹立たしくした。彼は、昨日の、カトレアに會つてから別れるまでの自分を思ひかへして見た。あの明るいスポンテニヤスな自分になり切つた自分を思ひかへして見た。が、その自分は、けふの自分とは何のつながりもなく全然の別人のやうな氣がした。病的な夢に出て來る自分のやうな氣がした。
事實それは不可思議な人格の轉換であつた。澄と定吉との事件から、暗く鎖されてゐた彼の胸は、無意識に、パッと開けた世界へのはけ口を探してゐたのであつた。それが、カトレアの偶然の出現をきつかけとして、別人格へむしろ病的に突進して行つたのであつた。しかし彼自身はこれをはつきりとは自覺しなかつた。
さうして彼の胸は、カトレアを思ふとき、怪しくも妙に明るくなつた。澄を思ふとき、暗くなつた。呆んやりしてゐると、彼の胸は夜のオーロラの如く怪しくぎら〳〵とゆれ動いた。
しかしこの明暗の彷徨は、その翌日になると、漠然とした一色に薄れて來た。更らに翌

日になると、それは秋の夕の霧の如く、暗く重く冷たく彼の眼前を鎖して來た。一度はあれほどからりと明るく突き拔けた眼前が、何故にかう鎖されて來たのか？　けれど彼はこの疑問を解くことを恐れた。

彼は幾月ぶりかで、庭園の南面の花欄の林へ出て行つた。その林の黒々とねばり强く延した枝を見て、ゆれ動く胸に力を吹き込まうとした。晩春に咲くその花――梨の花よりも深いうるほひを持つたその花を想つて、眼の前の霧を晴らさうとした。が、それは凡て無駄であつた。いつか彼は、カトレアと澄とを別々に考へることが出來なくなつてゐたのである。全く別種の、しかも緣もゆかりもないこの二人が、どうしてかう一つのものに溶け合つて、自分の眼前を暗くするのか？　けれど彼は、これをも解くことを恐れた。

カトレアと再び出會ふ約束をした日が明日となつた。その前夜のことである。彼は一寸したことから、妻といさかひをした。ほんの二言三言のいさかひであつたが、彼はこれまでになく昂奮した。彼は冷酷極まる眼を睜つて、妻の眼を凝視した。

妻は、結婚して十年のあひだに、始めてさういふ良人の眼を見た。彼女は唇まで蒼く

して、

「今晩、里へ泊りにやつていたゞきます」と言つた。

「幾日でも泊つて來るがいゝ」と彼は突つ放した。

「そんなら、三日も四日も五日も泊つて來ます」と彼女は、三日も四日も五日もに力を入れて言つて、涙をホロ〳〵こぼした。

彼は、妻の出る前に、洋服に着がへて、一人家を出た。一時間ほど、暗い樹立の通りを歩いてから烏山を訪ねた。玄關先で、

「外へ出てくれないか」といふと、烏山はすぐ外套をひつかけて出てくれた。

「馬馬に元氣がないね？」烏山はさう言ひ出した。

「今晩に限つたことぢやない」と彼は不機嫌に言つたが、やがて「爆發しさうな憂鬱だ」と强く頭を振つた。

烏山は、それには何も言はなかつた。二人はしばらく無言のまゝ、人通りもない屋敷街を歩いて行つた。やがて、

「たうとうやつて來たね」と烏山は、無氣味な低音を出した。「人間、半生を過ぎると、誰でも顫はれる憂鬱が、君にもたうとうやつて來たのだ。しかも君はブルヂョアだけに、一寸は救はれさうもない」

「僕は、資本家ぢやないよ」彼は、反抗する口調になつた。

「いや、資本家ならまだいゝ。彼等は闘つて後斃れるといふところがあるから、立派にあきらめもつくだらう。君は、流れ口もない泥沼に棲む魚のやうなものだ。ぢつとしてゐれば、またぢつとしてゐるより外はないのだが、さうすれば、永久に枯れさうもない水の中に生きて來た魚なのだ。しかし、その水が一度腐りはじめたら、流れ口がないだけ、魚はもう救はれない。そして君の沼の水もそろ〳〵腐りかけて來たのだね」

「そりや詭辯だ。でなけりや君の友情から出る言葉ぢやない」

「君は僕に甘えようとするのか」

「君は貧乏人のひがみと殘酷さを持つてゐる」

「冗談ぢやない。僕は君から、鐚一文の恩惠を受けようとも思つたことがないよ。正直を

いへば、僕は、君といふ友人を持つてゐることで、いつでも或る憂鬱な影を投げかけられてゐるやうな氣がする。僕は、君の書庫のうづ高く積んだ東西古今の書籍を見、彫刻のコレクションを並べたあの階下の暗い部屋を見る度に、沼の底に沈んだ泥を見るやうな氣がする。その臭氣を嗅ぐやうな氣がする。そしてさういふ中に平然と三昧境に浸つてゐる君を見ると、一つの奇怪な山椒魚を見るやうな氣がする」

「……」

「さうして、あの隣の、今は棲む人もなく朽ち果てたライト式の建物を見ると、印度古代の遺物、エロースの窟院か、アヂャンター窟院の一部を見るやうな氣がする。そこで酷使された當時の奴隷の骨の臭氣が、そのまゝあの中にこもつてゐるやうな氣がする。書庫のある建物はフローレンスのインノセンチ院を模したといふが、そのインノセンチ院は、別名に捨兒院とも呼ばれてゐるぢやないか。あの建物の地下には、赤兒の木乃伊が無數に横たはつてゐるやうな氣がする。君はその財力に任せて、あのやうな大きな名もなき墳墓を築いて來たのだ。さういふ中に平然と坐つてゐる君を見ると、僕は第六感のみで生きてゐ

る或る不可思議な相貌の僧侶を見るやうな氣がする……」
「烏山、もう默らんか」
彼は息を切らしながら叫んだ。道は、片側から椎の森に黑々と蔽はれて、稍々上り勾配になつてゐた。そこをしばらく上つて行くうちに彼は、森の下の石塀へよろ〳〵と凭れかかつた。そしてまた叫んだ。
「君は、僕を殺さうとするのか！」
「ハヽヽヽ」と烏山は冷たく笑つた。その聲が森の下に反響した。「少し恐くなつて來たね。だが安心したまへ、誰も君を殺さうとは思はないからね。只しかし、君が自滅する場合は、君であるだけに、誰もどうすることも出來ない」
「なぐるぞ！　……君は、僕の生活を破壞するために、まるで出鱈目の假說を誇張して、僕を怯やかさうとしてゐる。卑怯者だ」
「君は、金持のひがみと臆病を持つてゐる。君は、自分から先づ告白したのぢやないか。爆發しさうな憂鬱と。つひ五六日前も言つてゐる。親爺のかたみの馬車を見ると、親爺の

剝製を見てゐるやうだと。また言つてゐる。この一年間、一頁の讀書すらしなかつたと。僕は只、さうなつて來た君の生活の依つて來る原因を分解して見たに過ぎないのだ」
「そのことなら、君などに分解して貰ふ必要はない、僕自身がよく知つてゐる」
「知つてゐるだけぢや、知つたことにならない」
「君は何んにも知らないのだ。事の眞相を知らずに知つたかぶりの顏をするのが貧乏人の淺間しさだ。もう君の話は聞きたくない」
彼は、凭れた塀から身を放し、烏山の方へ見向きもせず、坂を登りはじめた。烏山はその後へついて歩きながら言つた。
「ほつといたら、君の憂鬱はひとりでに爆發するぞ」
「……」
「そのときは、只死があるばかりだぞ」
「……ぢや、どうすればいゝのだ？」
「その憂鬱を自分から爆發させるのだ」

「それは自分を殺すことになる」
「或ひはさうなるかも知れない。が、ならないかも知れない。それは君自身の體力と意力とに依つて極まる」
「もつと具體的に言つてくれ給へ」彼は僅かに烏山を顧るやうにしてそれを言つた。
「一切の所有を棄て、君の生來のブルヂョア的潔癖と嫌人癖とを同時に棄てゝ、君自身だけとなり、街頭へ出ろ、といふことだ。あの腐りかけた空氣に包まれた家屋と屋敷とを棄てゝ、民衆の中へ飛び出せ、といふことだ。君だから念を押しとくが、これを君の趣味の宗教心、藝術觀から解釋することは大禁物だよ。凡て明確な社會意識、世界觀から、確實に科學的に進出することだけが許されるのだ」
「ありがたう。理論としてはよく解る」
「理論卽ち行動だ。……しかし君の生活は、理論卽ち行動となる生活者とは、全然別の軌道を歩いてゐるのだからね」
「……おや、君は嗤つてゐるな」

「急に馬鹿々々しくなつたからさ」
「何が？」
「君は、あの女中の澄に、入院するほどの怪我をさしといて、それに對し物質上の責任だけを持ち、あとは恬としてゐる。さういふ君に何が出來るか、といふ氣がして來たからだ。さういふ君に向つて眞面目くさつてしやべつてゐた自分が馬鹿々々しくなつたからだ」
「宜しい。君は友情を弄ぶ奴だ。これ限り、君の顏は見たくない」
彼は急に大股に歩き出し、ぐん〳〵と坂を上つて行つた。
「ありがたう。それで僕もせい〳〵した」
烏山は、彼の背後へさう浴せかけて、坂を靜かに下りかけた。
坂を登つて行つた彼は、そこの十字路で一臺の圓タクを拾ふと、彼の家とは反對の方向へ疾走し出した。
間もなく、また一臺の圓タクが先の車を追つて疾走し出した。それには烏山がゐたのである。

二十分の後、先の車は　ホテルの前へ來て停つた。車を出た彼は、外套の襟を立てゝ急ぎ足にホテルの入口へ消えた。

それを見屆けた鳥山は、安心と不安と半々の氣持で車を引きかへした。

六

その翌朝、鳥山が再びTホテルへ彼を訪ねると、彼は既にそこを出てゐた。鳥山は不安のまゝ空しく引きかへした。

その日の午後五時が來たとき、彼の姿はT驛の婦人待合室へ現はれた。それまで彼の身はどこをどう彷徨してゐたか、彼自身も殆んど知らなかつた。

カトレアは、三十分ほど遲れて姿を現はした。エメラルド色の帽子に、房々とした白毛の襟卷を掛けてゐる。その中に眞白な顏が包まれ、その芯をなすやうに唇がほつちりと眞赤に光つてゐる。それはまことにカトレアの花であつた。

彼は大股に歩み寄り、その兩手を執つて、

「ありがたう、ありがたう。よく來てくれました」と溢れさうになつてゐた胸の思ひを一度に吐き出すやうに言つた。「さア、これから、この胸が爆發するやうな所へ連れて行つて下さい」

「どこへでも來てくれます？」カトレアは、小首を傾けて少し甘えるやうな表情をした。

「どこへでも行きます。お金のことは御心配なく」

「おゝ、可愛いゝお坊ちやん！」

五十分の後、彼等二人は、横濱驛の眞白なからんとした構内の出口に立つてゐた。いつか夜になつてゐた。前の廣場を横切つて、冷たい海風が吹き通つて來た。カトレアは一臺のタクシーを呼び、

「イセサキチョー、シブヤオデン」そんなことを言つてホッ〳〵と笑つた。十分の後、二人は、紺の暖簾のかゝつた家の土間のテーブルをはさんで坐つてゐた。

「こゝは、横濱の通人が來るところですよ。日本橋のK園よりずつと素敵でせう」

カトレアは、ハンドバックから出したコンパクトへ、いたずらつ兒のやうな顔を映しながらそんなことを言つた。

彼はそこで、始めておでんといふものを食つた。カトレアは何かひつきりなしにしやべりながら日本酒を飲んだ。彼には日本酒を飲む習慣はなかつたが、カトレアに負けず盃を乾した。

二時間の後、彼はカトレアに腕を執られてそこを出た。足元の大地が大きく波打つ。一目に見渡した夜の街の灯が、無數の花火の如く虹の如く、素晴らしく美しくきらめきゆれた。彼は大聲に叫んだ。

「おゝ、街頭！」

「さア、行きませう。あなたの胸の爆發するところへ」

カトレアは、彼の背を抱へて、タクシーへ押し込めた。タクシーは、彼が一本のアルハンブラをすひ切らないうちに停つた。岡の上の冬草と枯木を海風が吹き鳴らしてゐるやうな所である。振りかへると、遠く街の灯と、海と、船の灯とがきら〳〵とまばたき輝いて

ゐる。

「これはルアーブル？　それともマルセイユ？　ナポリの港？」

「いゝえ、あなたの大好きなカトレア姫の港」

カトレアはさう言つてから、とある洋館の門柱を跨いで馬蹄形に押し立てた看板を仰ぎ

「これがわたしのお家よ」

彼は、よろめく足を踏みしめて、聲を出して讀んだ。

「ダンシング・ホール……キユウル・アネエ・ホテル……はゝア、薔薇の谷ホテル、こりや素敵だ」

「一度入つて、その薔薇の花の香に醉つたら、二度と外へは出られませんよ」

チボ蘭が兩側から硬い葉を突き出してゐる。その間をだら〳〵と下つて行くと、いきなりピアノとヴアイオリンのチャズが響き渡つて來た。玄關へ立つと、カトレアは、

「おきやくさアーん」

と、流暢な日本語で叫んだ。（以下彼女は多く日本語をしやべる）

小女が出て來て、彼の外套と帽子を取つた。部屋を入ると、そこは酒場である。一人の若い外人が、スタンドへ肘をついてホットウヰスキーを飲んでゐる。窓際のテーブルには日本紳士が三人、女を相手にビールを飲みながらストヽン節を唄つてゐる。

「やア、おかへり、今日はまた結構な御同伴で」と、前頭のよく光る紳士が、カトレアを仰ぐ。

「こないだのお河童さんのドイツ紳士は、ありやどうなさいましたね」と、大きな赤鼻の紳士が聲をかける。

「しッ、およしなさいよ」と、傍の女が言ふ。

カトレアはツンと顎をあげて、彼の腕を抱くと、

「さア、こちらへいらつしやいね。こゝでは何を踊つてもいゝんですよ。わたし達はチェーク・ダンスをしませうか、ハッハ……」

そこは天井の低い十坪ほどのダンスホールである。ピアノとヴァイオリンの騒音が、ちんばを引きながら部屋中をころげ廻る。それに引き廻されながら五六組が踊つてゐる。オレ

ンヂスカートとラッパズボンと、友禪模樣と縞ズボンと、おさげと赤ネクタイと、接吻とさゝやきと、吐息と哄笑と、それ等が、左右の壁鏡の中に、綾をなしてもつれ亂れる。

彼は、一週前の東京でのダンスホールと對照し、只呆然と突つ立つてゐたが、つひに隅のソファーへ行つて、どさりと身を投げ掛けてしまつた。

反對側の隅のストーヴの周圍には、三人の紅毛人が、アスパラガスの葉を挿したハンチングを横つちよにかむり、めい〳〵一人の女を傍にして、途方もない聲でしやべり立てゝゐる。

「ねえさア、いつまでもおしやべりしないでさ」それは猩々紅冠鳥のやうに洋裝した女である。

「このひと、きがはやい。いやぢやありませんか」

ぢやが芋のやうな頰をした男が、妙なアクセントでさう言ふ。

「いやアな人。活動へつれてつてと言つてるのぢやないの」

「あゝ、あゝ、デンジロ、チャンバラ、よろし」

「わたしは、ウヰスキーをいたゞきますよ」これは黒襟に黒襦子の帶をした年増である。
「なんぼでも、おあがりなしやい」
「おい、マコちやん、またハダカダンスしよか」
「あんたが踊りや、踊らなくつてさ」これは斷髪に眞赤な帶上げを胸の上にひろげた女である。
「コシマキばかりで、海岸まで出かけてをどつたひと、どれ?」
「あの、オレンヂのスカートさ。おかげで三日も稼ぎそこなつたとさ」
と、隣りの酒場からカトレアの方へ大きな聲が起つた。
「おい、フエブローニヤ、いやに澄してやがるぢやねえか」
「ちよいと錠前屋のおかみさん、只で見せとくつもりかえ」
岸氏の肩に凭れかゝつてゐたカトレアは、煙草の煙を輪に吹きながら、
「えゝ〳〵、あとでどつさりおごりまつせ」
と、今度は高島屋の聲色で、

「どこの公爵樣か知らねえが、いや、すてきなかもだァ……」
「ちえッ、この人は Dorian Gray、わたしは Marguerite、あなたなんかに眞似も出來ない」
ソファーに身を沈めてゐる彼は、醉眼をひと所に集めてぢつとしてゐた。彼は、自分のからだが、幾つもの影に分裂してしまつたやうに感じた。そしてそれらが一つ一つ、自分から遠のいて行くやうに感じてゐた。彼はその影に向つて、手を延べ大きな聲で呼ばうとした。しかし自分は小聲一つ出せなくなつてゐる。自分はどういふ所へ來たのだらうか? それをはつきりさせる意識も飛散してしまつてゐた。彼はぢり〳〵しながら徒らに兩眼を瞬かしてゐた。
彼は、反對側の壁鏡に映る自分を見ようとした。それに依つて自分の實在をはつきり攝まうとした。しかしそこには無數の影の色と光と音とが果てもなく踊り廻り、荒れ狂ひ、彼の姿をも目茶苦茶に搔き亂し、無數の細片としてしまふ。相向ふ二つの鏡面の中の物體はその二つの鏡面へ無數無限の影を映すといふ現象が、こゝにも働いてゐたのであるが、彼はこの現象を自分の心理の現象としか考へなかつたのである。そして彼の心理もまた、

この鏡面と同じ作用をしてゐたのでもあつた。

鏡面を凝視してゐた彼は、やがてくら〳〵と、部屋がゆれめぐるほどの眩暈を感じ、傍へごろりと倒れてしまつた。

「ねえ、そんなに苦しい？　ぢや、二階のベットへ休みませう。さア、しつかり立つて」と、フエブローニヤのカトレアは、彼の肩をゆすぶつた。

「水だ、水だ」彼は打つ伏したまゝ息聲で叫んだ。

彼女は、ビールカップへ水を運んで來ると、彼を抱き起し、一息に飲み乾させた。それから彼の片腕を自分の肩に背負ひ上げ、

「坊ちやんでしようがない」と言ひながら、ホールを横切り、ドアを開け、二つに折れた階段をどし〳〵と登つて行つた。

七

その夜彼は、生れて始めて、人間の獸性とその美しさを見た。

それは、彼の裡に、五感以上の自分を目覺めしめ、同時に五感以下の自分を創造せしめた。そしてそこには、驚怖に近い恍惚が靜かに渦卷いてゐた。

次の夜遲くである。彼は、自家へかへるために、京濱電車の二等室にゆられてゐた。この時、彼は耳の底に、今まで聞いたことのない不思議な物音を聞いた、それは、今まで彼の周圍を取り卷いて積み上げられてゐた或るえたいの知れぬ物質が、ごとり、ごとり、と一つづゝ、崩れ落ちる音にも聞えた。眼に空虛で、そして或る重さを持つひゞきであつた。

それは實に堪らなく寂しいひゞきであつた。彼は何かに取りすがらうと藻掻いた。藻掻き苦しんでゐるうちに、彼の胸へふと浮んだのは澄であつた。

彼はほうつとした。彼は殆んど夢中で、その澄へ取りすがつたのである。つい數日前までは、彼の胸を徒らに暗く重くするばかりの澄が、今は、彼のためにさういふ働きをしてゐるのである。そしてそれは、實に充實した新鮮な存在として働いてゐるのである。彼の

からだは本能的にその澄の方へ吸はれて行つた。彼はそれに依つて辛らうじて、先刻のいやなひゞきを防ぐことが出來た。

彼は、S驛から傭つたタクシーを門前でかへして、一人、兩側からヒマラヤ杉の繁つた門内の砂利道を、毀れものを運ぶやうにして、靜かに歩いて行つた。

と、暗闇からいきなり、愛犬のテリヤが飛びついて來た。彼はぎよつとして、力一ぱいその首を拂ひ除けた。と、また大きな黒い影がひよつこり現はれた。彼は更らにぎよつとして、

「だれだ！」と叫んだ。

「おかへりなさいまし」と黒い影は答へた。

「だれだ？」

「私でございます。定吉でございます」

彼は息をはづませて、

「貴様か。こんな所でだしぬけに、馬鹿な奴だ」

「申し譯ありません。實は旦那様へ直接秘密に申し上げたいことがありますので、茲にお待ち申してゐたのでございます」

「お金のことか？」

「いゝえ、實は、あのお澄さんが、たうとう死んでしまつたのでございます」

「え？　もう一度はつきり言へ！」

「お澄さんが死んだのです」

「それは、ほんたうか？」

「こんなこと、嘘を申されるものではありません」

「なぜそれを僕に知らさなかつた」

「昨日も一昨日も、旦那様のお姿が見えませんので」

「よし、それぢや、これから病院へ行かう」

「いゝえ、もうお骨にしてしまつて、葬式も目黒の親の家で今日の夕方に濟んでしまひました」

「一體、いつ死んだのだ」
「一昨日の夜中です。昨日も今日も旦那樣のおかへりを待つてゐたのです」
「……」
「それでお願ひがあるのですが」
「何でもいへ」
「お金のことでございます。お澄さんの父親が、旦那樣の仕打ちについて、少しつむじを曲げて、これから旦那樣の所へ怒鳴り込むのだ、などと言つてますので、私が代つて來たのでございます。……お金をたつぷり惠んでやれば、それで萬事無事に落着することゝ存じますのです」
「金なら、ほしいといふだけやらう。明日、僕の部屋へ取りに來い」
「いゝえ、實はそれを今晩中にいたゞきたいのです。葬式その他の費用、凡て待たしてありますので」
「ぢや、これから僕の部屋へ來い」

彼は、自分の部屋へ、他人の家へ忍び込むやうにして入り、定吉を誘ひ入れた。そこで彼は、金庫にあるだけの現金と小切手とを定吉の手に渡した。その金額は、澄の父が望んだ額の十倍に當つてゐた。
それを見た定吉は、また言ひ出した。
「實は私も、今晩限り、お屋敷をおいとまいたゞきたいと存じます」
「それは何故だ?」
「わけは申し上げなくとも、旦那樣にはよくおわかりのことゝ存じます」
さう言つてゐる定吉から、彼は脅迫に似た或る壓迫を感じた。彼は稍々たじろぐ風に、
「……さうか。ぢやお前の好きなやうにするがいゝ」と言つた。
彼はそこで、澄の父親へ與へた金額の半額ほどを、小切手で、定吉の手に持たした。定吉はひそかに狡猾な笑ひをもらした。
定吉のかへつた後、彼は殆んど喪心狀態で何時間かをそこに坐つてゐた。庭の池の水鳥が、朝の光を吸ふために飛び立つ頃、彼は二階の寢室へ上つて行つた。

と、そこには、里へ泊りに行つてゐる筈の妻がゐた。妻は、着物を着たまゝ、寢床の上にきちんと坐つてゐた。そして彼の姿を見ると、わーッと聲を立てゝ泣き伏してしまつた。

彼は妻を抱いてやつた。しかしそれはまるで、木偶の坊を抱いてゐる感じであつた。

こゝで作者は、一足飛びに、一年後のこと、即ち、彼の死の前後の描寫に移らうと思ふのである。何故ならば、この一年間の彼の變化は、これ迄に說明して來た彼の心理狀態をそのまゝ讀者の想像に依つて布衍して行けば、充分に解ることだからである。

作者の友人が、曾て古井戸へ落ちたことがある。藪へ篠竹を切りに入り、過つて落ちたのである。幸ひ怪我もせず水も淺かつた。が、五十尺あまりの深さで、底は袋のやうにえぐれてひろがり、自分の力で出ることは全く不可能であつた。すると、そこに一疋の大蟇が、彼より先客に落ちてゐたのである。蟇は眼を光らし大きな手をひろげて、彼の方へ泳ぎ寄つて來た。彼は殆んど氣絕せんばかりに怯かされた。彼は叫び聲をあげ、蟇の足を引

つ捕へるや、夢中で天井へほうり上げた、けれど蟇は壁面にぶつかつてぽしやりと落ちて來た。彼はそれを幾十度となく繰りかへした。蟇は彼の頭や首筋へも落ちて來た。彼は疲れて來た。蟇を放逐することは全く不可能となつた。彼は聲限り救ひを呼んだ。が、それにも疲れ果てた。一晝夜が過ぎた。彼は死を覺悟した。すると、その大蟇が彼にはなつかしいものに思はれて來た。死を覺悟した自分の前に、一つの生きものが泰然として存在してゐるといふことが、堪らなく心强く、そしてなつかしく思はれて來た、といふのである。

この一年間の彼の心理の變化は、右の話によく似てゐる。

彼はこの一年間に、凡そ四十度ほど、キユウル・アネエ・ホテルを訪ねた。十度ほど訪ねたとき、彼は、自分は古井戸の底へ陷ちてゐることを知つた。彼は心中におのゝきながら、自分の棲み家へかへつて來た。が、そこも同じ古井戸の底であつた。そこには烏山が曾つて言つた廢寺に似た建物、窟院を想はせる建物、親父の剝製の馬車、泥沼の臭氣を發散する書庫とコレクションの置場があるだけである。この方がむしろ怖ろしい古井戸であつた。彼は全身の精力と意力とを以て、こゝから脫出しようとした。烏山の所謂街頭

へ、民衆へ、まつしぐらに進出しようとした。が、その足場、手がかりは何處にも見出せなかつた。街頭なるもの、民衆なるものは、何十尺の深い竪穴を通して、かすかに明るく見えるだけであつた。鳥山は曾て、彼の建物を指し、君はその財力を以てかくの如き無用の墓を築いた、と言つたが、今は、彼自らその財力に依つてこの古井戸を掘りつつあるのであつた。彼は鳥山に向つて救ひを呼ばうとした。が、今はその聲を鳥山の耳に届かせることも不可能に思はれた。こんな時、あの澄がゐたら、と彼はそれを痛切に思つた。

彼は自分の棲み家が怖ろしくなつた。そしてまたホテルへのがれて行つた。が、それは二つの古井戸の底を通ずるトンネルを往復するやうなものであつた。動くことは外界へ出ることにはならなかつたのであつた。

二十度ほどホテルへ出入したとき、彼は相手のカトレアが非常に恐ろしい怪物に見えて來た。彼はこの怪物をあらゆる方法で、その世界から放逐しようとした。がそれは全く不可能であることがやがて解つた。彼女は、暗黒と腐敗水の中にも平氣で棲める兩棲動物だ

からである。その上彼は、彼女に取つて無盡藏の食物でもあつたからである。

この頃彼はよく自分の死を思つた。さうして彼は、朝、ホテルのベットの上に眼を覺しほんやりと煙草をふかしてゐると、例のひゞき、何かえたいの知れぬ物質の崩れる寂しいひゞきを耳底に聞いた。はじめそのひゞきは、からだの外からひゞいて來たのであつたが、今は、からだの裡からひゞいて來た。彼はそれを、心臓の崩れる音ともきゝ、骨格の毀れる音とも聞いた。彼は死を思つた。

三十度ほど訪ねたときである。彼はいつかこの世界を唯一の安住所と思ふやうになつてゐた。そしてカトレアが、彼の唯一の心頼みであり、好侶伴であるやうになつてゐた。彼は最早、外界の光をすら恐れるやうになつてゐた。

この頃、彼の妻は肋膜と稱し、一人の女中をつれ、里の母親に伴はれて、遠く瀬戸内海の海岸へ、半永久的に轉地してしまつた。そしてその後へ、里の父親——B男爵が、後見人らしい顔付をして住みこんで來た。

彼には最早、どの意味でも、自家へかへる必要がなくなつた。彼は熱海のAホテルへ自

分の居間を移し、そこからキウエル・アネエ・ホテルへ往復した。

かくて一年が過ぎたのである。そして二月十二日が來た。

その夕方、彼は伊勢佐木町のH堂の三階で、一人支那酒に醉ひ、機嫌よく口笛を吹きながらカトレアのお家を訪ねた。と、カトレアは留守であつた。その日は日曜日であつた。

「あいつ奴、また東京へ出稼ぎに行きやがつたんだらう」と彼はスタンドのおかみへ言つた。この頃の彼は、わざと下司つぽい物の言ひ方をするやうになつてゐた。その顏も妙に鋭どく蒼褪めてゐた。この一年間に彼は全身の血液の半分を失つたやうになつてゐたのである。

「あなたを差し置いて、だれがそんなことをするものですか。そんな必要もなし」

「馬鹿言へ、あいつ、アザラシ見たいな奴だよ」

彼は立つたまゝウヰスキーを飲んだ。今までかういふ場合には、彼は部屋のベットでカトレアのかへりを待つてゐるのがきまりであつたが、その夜の彼は、なぜかさうするのが癪であつた。

彼は、酒場からダンスホールを一廻りして來ては、スタンドの前でウヰスキーを飲み、ヂンを飲んだ。そして少し呂律が怪しくなるまで醉つた。彼はおかみへ怒鳴つた。

「おい。代りを出せ。そら、五六日前始めて來たといふ女があつたろ。俺の顏を遠くからちらりと見て逃げてしまつた奴さ。あいつを出せ」

「まア、そりや無理よ。カトレア姫に殺されますよ」

「その前に、あいつを殺してやる」

「それにね、あの子は、たつた一晩きりで、何處かへ出たなり、歸つて來ないんですよ」

「何處へ行きやがつたんだ?」

「大方、いゝ人がつれ出しに來たのでせう」

「あいつは、混血兒だね。カトレアより十倍も上等だつたぞ」

「冗談ぢやありません。只のニッポン・ガールさ」

「逃げられたもので、何とか言つてやがる」

さう言ひながら彼はダンスホールの隅のソファーへ行つた。そこにはマコちやんといふ

女が、寢ころんで葉卷をふかしてゐたが、ふと起き上り、彼の耳元へ口を寄せ、
「ねえ、キイさん、わたし、あの混血兒さんのゐどころを知つてるわよ」と囁いた。
「何處だえ、敎へろ」
「只ぢやねえ――」
彼はポケットから一枚の札を攫み出してその女の手に持たした。女はニヤリとして、
「ね、そら、この山を越して、海岸の裏通りのドナウ・ホテル、あそこへ行つてるわよ」
三十分の後、彼はドナウ・ホテルの前へタクシーを停めてゐた。彼はステッキで、玄關の柱をなぐつたりしながら、よろ〳〵と入つて行つた。丸髷に黑襟のでつくり肥つたおかみが出て來た。これも少しよろけながら、
「おゝ。ウエルカム、マイボーイ」といふや、いきなり熟柿臭い口を近づけて來て、その濡れた唇を彼の頰へぺた〳〵と押しつけた。
彼は内ポケットから、大きな札を一枚出して、おかみの手に持たせながら、
「おい、君んとこに、四五日前來たばかりの混血兒さんがゐるね。あいつを頼むぜ」

おかみは、手の内の札を見てびつくりし、その札を兩手に持ち、猫が毬を持つたやうに持ち廻りながら、醜いほどに顏を歪めて喜んだ。
「おい、その子はゐないのかえ？」
「あゝ、ついぼんやりしちやつて……えゝ、えゝ、ゐますとも。さア〳〵どうぞこちらへ」
酒場には支那人らしい男が二人、ビールを飲んでゐた。となりのダンスホールには、三四組がレコードで下手なワルツを踊つてゐる。その周圍を大きな黑猫がうろ〳〵してゐる。
おかみは階段の下へ立つて景氣よく、
「ちよいとゆきちやん、大至急、下へ來て」
返事をして、やがて階段を下りて來た女は、ストーヴの前の椅子に首を垂れて掛けた彼の姿を見ると、そのまゝ忍び足に引きかへしてしまつた。
おかみはまた女を呼んだ。今度は返事もない。
「困つた子だねえ」おかみは、階段を登つて行つた。四五分して下りて來たおかみは、彼の傍へ凭れるやうに立つて、

「あんたがあんまりいゝ男なので、あの子は恥かしいんだとさ、まるでおぼこだからねえ」

彼はそこでまたウヰスキーとヂンをちやんぽんに飲んだ。そしてぐつたりとなつてしまつた。その間におかみは、三四度二階へ往復したが、最後に彼の手を執つて、

「ねえ、もう十二時ですから、お休みしませう」と彼を引き立てた。

彼は二階の部屋へ上ると、上衣とカラーを取つただけで、ごろりとベットへ倒れてしまつた。倒れたまゝ彼は言つた。

「あとで、あの混血兒さんに水を持つて來さしておくれよ」

彼は眠るまいと努力した。周圍の壁に、活動俳優のプロマイドや、三色版の風景がべたべたに貼られてある。彼はそれを一つ一つ見ることに依つて、半ば夢心地ながら眼を開いてゐた。

と、やがて女が、忍び込むやうにこつそりと入つて來た。なぜか眼を泣き腫らしてゐる。そして窓の下に立つたきり身動ぎもしない。彼はこの時始めて女の顔をしみじみと見

たのである。と、その眼が急に異樣に輝いて來た。彼はベットの上に身を起し、

「おい、お前は澄ぢやないか！」と叫んだ。その顔はむしろ凄かつた。

女は兩手を顎の下に縮めて顔を伏せた。彼は更らに身を起し、何とも言へない鋭どい聲で

「おい、おい、お前は澄ぢやないか！」

瞬間、彼は現實と夢を全く混同してしまつた。やがて女は、ふるへ聲で答へた。

「えゝ、わたし、澄です」

「……澄だ？……しかし、そんな筈はない。お前は死んだ筈だ！」

それを叫びながら彼は、夢の中から現實の中へ呼びかけてゐるやうな氣がしてゐた。

「……」澄は答へない。

「お前が生きてゐる筈はない。お前がこんな所へ來てゐる筈はない」

「えゝ、わたしも旦那樣がこんな所へ出入してゐるとは思ひませんでした。このあひだあのキウエル・アネエ・ホテルではじめて旦那樣の姿を見たとき、私もびつくりしました。そして自分のことが急に恥しくなり、こつそりあそこを脱け出して、こゝへ移つてゐたの

ですのに……」
「俺はそんなことを訊いてゐるのぢやない。お前は死んだ筈だといふのだ。生きてゐ譯はないといふのだ。」
しかしこの疑問は、彼女にはまるで通じなかつた。彼女は不審氣に答へた。
「……えゝ、わたしは死んだも同じです。旦那樣が、あの定吉にあんまりどつさりお金をあけたもので、わたしはこんなことになつてしまつたのです」
今度は、この言葉が彼には全く通じなかつた。
「それは何のことだ。俺にはさつぱり解らない」
「定吉は、あのお金をかぶと町とばくちでたつた半年のうちに使ひ果してしまつたので す。それでわたしはカフエーへ働きに出ねばならなくなつたのです。そのうち、定吉の刑事問題でお金がいることになり、たうとうわたしはこんな所へ賣られてしまつたのです」
その言葉を聞いてゐるうちに、彼は耳の底に、例の物の崩れる音、堪らなく空虛な寂しいひびきを聞いた。と、思ふうち、それが、がら〳〵ッ……と總崩れに崩れ落ちて來た。

と同時に彼は、心臟も腦髓も骨格もばら〳〵に崩れ毀れたやうに感じた。
彼はぢつとしてゐられなくなつた。何物かにすがらずにはゐられなかつた。そしてこの場合、澄は、彼にはたとへ夢の中の幻影であつても、彼の取りすがるべき唯一のそして最上の存在であつた。
彼は床の上に下り立ち、長い兩手をひろげてふら〳〵と澄の方へ歩み寄つた。その顏はこの世の人の顏ではなくなつてゐた。妖怪！ しかし更らに奇怪に凄かつた。
彼女の頭には一年前のことが電光のやうに閃めいた。彼女の息の根を止めるほどに擲りつけた彼の殘虐さを思ひ出した。そしてこの人は自分を殺すためにこんな所へ來たのだ、今度こそほんとうに殺されるのだ、と感じた。
彼女は鋭どく叫び、窓から外へ飛び下りようとして、硝子戸をがらり開けた。と、三尺ほどの太い針金がぴんと彈ねて床の上へばたりと落ちた。(それは、窓から半間と離れないHホテルの新築場の足場と、この部屋の窓との間に突つ張つてゐたものらしかつた。)この物音に彼女はぎくりとして、瞬間立ちすくんだ。と、いきなり骨のやうな手が彼女の兩肩

を摑んだ。同時に空洞のやうな眼と、白い齒をむき出した大きな口とが、すぐ眼の上にゆらゆらとゆれた。

彼女は殆んど意識を失つた。全く夢中で床の上の針金を拾ひ上げるや、眼の前の長い首へぐるりと一つ卷いて、力一ぱいにねぢり上げた。

相手は聲も立てず、掛布團の端を引つつかんでふら〳〵となつたが、そのまゝごろりと床の上へ倒れてしまつた。

彼女は、ドアを蹴破るやうにして廊下へ出ると、隣室の日本座敷へのめり込み、昏倒してしまつた。彼女はそこで恐ろしい夢を見た。それは僅か十分間のことであつたが、彼女には一晝夜の惡夢を見つゞけたやうに感じた。彼女は夢にうなされて起き上り、まるで夢遊病者のやうに階段を下りて行つた。そして凡てが惡夢のつゞきであつた。彼女はスタンドの前にアメリカ青年がカクテルを飲んでゐるのを見ると、そのカップを引つたくり、ウヰスキーをつゞけざまに五六杯あほつた。それからアメリカ青年の手を執り、目茶苦茶なチャーレストンを踊りはじめたのである。

——一九二九・五月

昭和五年三月二十五日印刷
昭和五年三月二十八日發行

現代春陽文學選集
ある私娼との經驗
定價三十錢

著者　下村千秋
發行者　森園豐吉　東京市神田區淡路町一〇番地
印刷者　東勇治　東京市小石川區久堅町一〇八番地
印刷所　共同印刷株式會社

發行所　東京市神田區表神保町一〇番地　天人社　振替東京五五二〇番　電話神田二六八七番

現代暴露文學選集

暴力	外五篇	武田麟太郎
ある私娼との經驗	外六篇	下村千秋
熊の出る開墾地	外六篇	佐左木俊郎
工場勞働者	外二篇	岩藤雪夫
或る自殺階級者	外三篇	淺原六朗
パルチザンウォルコフ	外六篇	黑島傳治
炭坑	外五篇	橋本英吉

各冊　三十錢